

言葉と読書
映像化時代

はじめに

さて、今回の『言葉と読書・映像化時代』という作品は、「言葉と読書」という作品と「映像化時代」という作品とを、いわば「一つに統合した」ものであるが、その内容は、まず、「言葉1」では、いかに言葉が大事かを考察し、それは、「言葉」というのは、より正確に、より厳密に使うことによってこそ、初めて、物事をより正確に、より厳密に「判断し、評価し、認識する」ことができ得るようになるということであり、逆に、「言葉」というものを、いいかげんに、あいまいに使っている限りは、いつまでたっても、あいまいいいかげんな「判断、評価、認識」しかできないということである。――また、「言葉2」では、「おしやべり」と「話をする」それに「文章を書く」ことについての基本的な「考察」であり、また、「読書1」では、そもそも「読書」とは、一体、何のために行なうものなのか？ それに関する「対話形式」での考察であり、そして、「読書2」では、まさに「一読↓精読↓味読（熟読）↓愛読」へと向かう本格的な「読書論」になっている。すので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

一方、「映像化時代」というのは、一体、どのような時代かと言えば、それは、今までのような「活字」を中心とした伝達方法ではなく、例えば、映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、動画、(写真)、その他、そのような様々な「映像」(写真)などを使つての伝達方法がより多くなる時代のことであり、また、テレビが持つ最大の「長所」とは、一体、何かと問えば、それは、まさに「生中継」が出来るということであり、それは、国内であろうと国外であろうと、まったく関係なく、今、現に起こっていることを同時に、しかもそのままそっくり見せてくれるものであり、これは、何と言つても、最大の特徴の一つである。――つまり、今そのものを、現在そのものをそのままそっくり映し出しているものであり、映画やDVDあるいはハードディスク(録画用)、その他などのように時間的にはすでに過去になっているものではなく、今、この時、この瞬間を、まさに鮮やかに映し出しているわけであるから、それが何と言つても、「テレビ」の持つ機能の最大長所の一つと呼んでもよいものである。それに、テレビの推移をはじめ、映像の流れとは、一体、どのようなものなのか？ また、潜在意識とコマーシャルとの関係、そして、子供への影響、その他の考察であり、それらに加えて、「人間の眼」と「カメラの眼」との根本的な違いについての「一般的な考察」であり、そして、最後は、「従来のメディア」(マスメディア)と今日の「インターネット」との圧倒的な「違い」についての基本的な考察であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和二年三月吉日(決定版)

如月翔悟

目次

はじめに

言葉について I

言葉について II

- 一、 おしゃべり
- 二、 話をする
- 三、 文章を書く
- 四、 結び

読書とは
(対話形式)

読書について

- 一、 読書の方法
- 二、 狭義の「読書」
- 三、 愛読の極致
- 四、 結び

目次

映像化時代

- 一、 映像の特徴
- 二、 読書との違い
- 三、 自然と選択を：
- 四、 長所や利点
- 五、 テレビの推移
- 六、 テレビの影響
- 七、 記憶の推移
- 八、 映像の流れとは
- 九、 潜在意識
- 十、 子供への影響
- 十一、 家庭環境
- 十二、 乳幼児から

人間の眼とカメラの眼との違い

- 一、 人間の眼
- 二、 カメラの眼
- 三、 写真の特徴
- 四、 映像の特徴
- 五、 インターネット時代
- 六、 結び

言葉について
I

言葉について

乱れた言葉を平気でどんどん使える

その心が、すでに乱れている。

荒廃した言葉を平気でどんどん使える

その心が、すでに荒廃している。

人は、これをなかなか認めたがらないものであり、口では愚かで幼稚なことをあれこれ話しているけれども、しかし、「頭の中」(或いは「心の中」)では、かなり高邁こうまいかつ高遠な世界をさまよっているんだけれども、ただそれをうまく言葉で表現できないだけなのだと、あるいはただ口にしないだけなのだと、人はよく言いますが、もちろん、そういう場合も多々あるだろう。しかし、また、われわれが日常あれこれと話をしている言葉や取りのなかには、自ずからその人の「人となり」というものがあらわれるものであり、――また、「文は人なり」という言葉があるが、それは、いったいどういう意味かと言えば、それは、文章作成にあたっては、その人なりに何度も吟味を重ね尽くして、その人なりに「これでよい」というものになっているだろう。ならば、……

その文章には、必ず、その人なりの「思い」が込められているだろう。

その文章には、必ず、その人なりの「考え方」があらわれているだろう。

また、使う言葉の流れは、すなわち、その人の「思考の流れ」であり、

また、使う言葉の流れは、すなわち、その人の「心情の流れ」でもあり、

さらに、使う言葉は、その人とともに存在するという意味合いでもあって、

使う言葉が乱れている、いかげんである、あるいはあいまいであるとすれば、それは、やはりその人の「思考や心情」が乱れている、いかげんである、あるいはあいまいであるとみても、それほど大きな誤りにはならないだろうと思う。

なぜなら、ほんとうにその人が人間として「成長・成熟」してくれば、自ずといかげんでたらめな、あるいは意味のない言葉などを、平気でどんどん使ったりするようなことは、できにくくなるだろうから。もちろん、時に応じて、冗談を言い合ったりするようなことは、当然あるだろうが……。

――使う言葉は、つねにその人とともに存在するのであって、

使う言葉が乱れるのは、すなわち、その人の「心の乱れ」から生じるものであり、

言葉は、単なる意味を伝えるだけの道具や記号とは、少し違ったものになるだろう。

――言葉は、もつと正確に、もつと的確に使うべきであり、そうすることによって、初めて、物事をより正確に、より厳密に「判断し、評価し、認識する」ことができ得るようになるのである。逆に、「言葉」というものを、いかげんに、あいまいに使っている限りは、いつまでたっても、あいまいでいかげんな「判断、評価、認識」しかできないことになるのだろう。

それは、いつ頃のところからはよくは知りませんが、

恐らく、「道徳」という言葉から「モラル」という言葉に変わった頃から、「道徳」というものがあいまいになり始め、そして、

「パパ」「ママ」というような言葉が流行し始めた頃から、恐らく、「父親」「母親」の存在というものがあいまいになり始めたのではないだろうか……。

——「語感のない」言葉が、「あいまい」な言葉が、あるいは「確かな手応え」のない言葉が、社会や巷ちまたに満ちあふれ、そして、乱れ果てるるとき、恐らく、人間の「思考能力」は、ますます低下し、精神も乱れはじめ、そして、あらゆるものが「あいまい」になっていくだろう……。

これは、少し話が違っても知れないが、「バベルの塔」というのは、多くの人がよくご存知だろうと思う。ちなみに、辞書で引いてみると、

「ノアの大洪水の後、人々が天に達するような高塔を築き始めたが、神は人間の僭越をにくみ、人々の言葉を混乱させ、その工事を中止させたという。……」

(創世記十一章)

言葉が乱れ、混乱することは、

すなわち、人間の精神が乱れ、混乱することである。

それは、なぜか？ なぜならば、

「言葉はそも、人とともにあるがゆえなり……」。

*

*

言葉について
II

言葉について II

言葉などはいかようにも使用できる。

人は平気でうそをいうのではないか！
でたらめなことを平気で並べ立てるではないか！

言葉ほどあてにならないものはない。

言葉など、どうして信じられようか！

もちろん、「疑う精神」は、「健全な精神」であり、盲目的に信じるよりは、よほど重要かつ大事なことになるのだろう。ただ想うに、言葉の「使い方」には、次の二通りの使い方があるのかも知れない。つまり、言葉をただ意味を伝えるだけの道具、あるいは記号に過ぎないと考えて使っている人と、言葉を大事と感じて、自分の「思いや考え」のすべてを、「使う言葉」になかに吹き込もうと努めている人とがいるのだろう。

なるほど、前者の人の「使う言葉」は、それほどあてにはならないかも知れないが、しかし、後者の人の「使う言葉」は、ある程度までは信じていることができるのではないだろうか。なぜなら、一つ一つの言葉を手のひらに乗せて、その言葉の「色艶（いろな）、重さ、響き、広がり、意味、姿（すがた）・形、その他」などをじっくりと見極め、十分に消化をして、その人なりに、いわゆる「自分の言葉」として使用し、しかも、人間や様々な物事の「本質、真理、真実、源泉、その他」などを重視した「思考（思索）活動」を行なっているからである。

さて、われわれ人間が、ふつう「言葉」を使う場合というのは、大きく分けて、次の三つぐらいの場合があるのではないかと思う。つまり、

一つは、日常、比較的軽い気持ちで相手と言葉を交わす場合の「おしゃべり」。

一つは、ある程度、まとまった内容を人に伝えるために「話」をする場合。

一つは、自分の思いや考えを伝えるのに話し言葉ではなく、「文章で書く」場合。

すなわち、「おしゃべり」と「話をする」それに「文章を書く」という、この「三つの場合」があるということである。

一、おしゃべり

まず最初は、「おしゃべり」について、少し話してみたいと思うが、確かに、われわれ人間は、ふだんずいぶん安易に「言葉」というものを使用しているかも知れない。また、言葉を使っているのか、言葉に使われているのか、よく分からない場合も多々あるかと思う。しかし、それは、多くの場合、「おしゃべり」の時であり、比較的軽い「おしゃべり」などをしているような時ではないだろうか。

つまり、「おしゃべり」というのは、相手の言葉に対する「受け応え」であり、その人が、相手の言葉に対してどう対応するかは、その人のその時々の「心の状態」に大きく左右されるものである。つまり、相手の言葉に対して、素直にまた真摯な態度で応える場合もあれば、逆に、相手の言葉に対して、はぐらかしたり、うそをついたり、あるいは冗談を言ったり、ふざけたりするような場合もあるのだろう。

しかし、たとえそれがどのような対応の仕方であれ、それは、その時々その人の「心

の動き」から生じて来るものであり、それゆえ、例えば、その人の言葉の「微妙な動き」というものは、そのままその人の心の「微妙な動き」の表れであり、それゆえ、その人の言葉の「微妙な動き」（それは微妙な「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の強弱なり、言葉の内容なり」）を、しっかりと見極める、聴き分けることこそ、何よりも大事なことであり、そうすれば、相手の人が、一体、どのような「心の状態」から、そのような言葉を使ったのか、また、相手の人が、一体、どこまでほんとうの話をしているのか、それとも、いいかげんな話をしているのか、そういうことが、その人なりに識別出来るようになるだろうし、また、その時々気まぐれな「心の状態」から生じてきた言葉などにも、それほど意味なく振りまわされることも少なくなるのではないかと思う。

そして、その時々その人の「心の動き」をしっかりと見極めることも、むしろ大事なことであるが、しかし、最終的には、その人のその時々気まぐれな「心の動き」をあれこれ意味なく追うのではなく、もつとその人の「心の底」にある、その人自身の「本質的な部分」をしつかりと見極め、掴むことこそは、何よりも大事なことになるのだろう。そして、その人の「本質的な部分」をしつかりと見極め、掴んでしまえば、その人が、たとえどういうことを言ったり、行なったりしても、それほどさういう「表面的な言動」などに意味なく振りまわされることも、少なくなつて来るのではないかと思う。

確かに、われわれ人間は、うそをついたり、いいかげんなことを言ったり、あるいはでたらめなことを並べ立てることがあるかも知れない。しかし、それは、その人が「うそをついてやろう、いいかげんに受け応えておこう、あるいは人をだましてやろう、あるいはそういうふうな受け応えておいた方が、自分にとつて都合がよいだろう」というような、そういうその時々その人の「心の動き」から様々な言葉となつて、外に現われて来るものであり、それは、使われる言葉とそれを使う人間との間には、極めて親密な関係があるということである。——つまり、使われる言葉は、必ずそれを使う人の「心の動き」を受けて、表に現われて来るものであり、それがたとえうそであれ、いいかげんなことであれ、それは、その時々その人の「心の動き」から生じて来るものであり、なぜ、うそを言うのか、なぜ、いいかげんなことを言うのかは、その人のその時々「心の動き」に大きく左右されるものなのである。

それでは、なぜ、われわれ人間は、「うそ」を言うのかと言えば、それにはもういろいろな理由があるかと思う。例えば、ほんとうのことを言えば、何らかの意味で自分の立場が不利になるような場合もあるだろうし、また、うそを言つて相手をうまくだますことによつて、何らかの利益を得るような場合もあるのだろう。また、その場の雰囲気や気分などを盛り上げるために、うそや冗談などを言つたりする場合もあれば、また、誰かをかばつたり、あるいは病気や様々な秘密などを公にすれば、かえつてその人を傷ついたり、気落ちさせるのを避けるために、うそをつくような場合もあるのだろう。また、人間関係を円滑にし、できるだけ相手との不必要な摩擦を避けるために、いわばその「潤滑油」として使われる場合も多いのだろう。そのように「うそ」といつても、いろいろな場合があり、そのすべてが悪いというのではなく、やはり「うそ」を言うことによつて、例えば、人を傷ついたり、欺いたり、あるいは何かをだまし取つたりするような、いわゆる「うその悪用」こそは、最もよくないことになるのだろう。

話を元に戻したいと思うが、使われる言葉は、必ずそれを使う人の「心の動き」を受け

て、表に現われて来るものであり、それゆえ、それがたとえうそであっても、いいかげんなものであっても、必ず、それは、その時々その人の「心の動き」のはっきりとした表れであり、それゆえ、使われる言葉とそれを使う人間との間には、切っても切れないほどの深い関係があるということである。つまり、使われる「言葉」というのは、勝手に存在するのではなく、必ずそれを使う人の「心の動き」を受けて、表に現われて来るものであり、それゆえ、使われる言葉は、必ず、それを使う人の「心の動き」を何らかの意味で反映し、表していることになるわけである。それだけ「言葉」と「人間」との関係は、どこまでも親密かつ切っても切れないほどの「深い関係」にあるということである。

そして、大事なことは、表面的な「言葉の意味」だけに振りまわされずに、どういう「心の動き」から、そういう言葉が表に現われて来たのか、その「真意」をしつかりと見極めることこそは、最も大事なことになるのだろう。つまり、表に現われて来た「言葉」を、そのまま盲目的に信じるのではなく、表に現われて来たその「言葉」を手がかりとして、その人の「心の動き」や「真意」というものを、しつかりと見極め、聴き分けることこそ、最も大事なことになるということである。

それじゃ、やっぱり言葉は、信用できないということじゃないですか……。

むろん、「言葉を否定することは、すなわち、人間を否定することである」。なぜなら、あれこれものを考えたり、こうして話をしたり、あるいは、「新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、その他」、何であれ、人の話を聞いたり、人と話をしたり、本を読んだり、あるいは独り物想いに耽ったりするようなこと、それらすべては、「言葉」を使って行なわれている。その「言葉」を否定したら、一体、どういうことになるのだろうか？

例えば、睡眠中は、どうだろうか？ もし夢を見ているならば、そこには、何らかの言葉が存在するだろう。もし、夢を見ていないならば、恐らく、言葉は、存在しないだろう。しかし、それは、人間としては、ほとんど「死」に近い状態である。また、生まれたばかりの赤ん坊は、どうだろうか？ 恐らく、その赤ん坊の「頭の中」には、まだこれという「確かな言葉」は、存在していないかも知れない。しかし、それは、「人間らしい活動」は、まだできないという状態である。つまり、現時点においては、まだまだ「動物的な存在」に極めて近いと言えるものである。やがて、人間らしくなるのは、ただ単にからだが大きくなるからではなく、むしろ言葉を使つてものを考えるようになるからである。

われわれ人間は、夢を見ていない睡眠中か、まだ、言葉を知らない赤ん坊の時以外は、一時たりとも言葉なしでは生きられないほど、たえず言葉を使つてあれこれ思ったり、考えたりしているわけである。それゆえ、言葉がなくなれば、われわれ現代人は、ものをあれこれ考えたり、人と話をしたり、また、生きていくことすらできないほどである。——つまり、言葉があればこそ、われわれ人間は、人間としての様々な活動ができるのであり、もし言葉がなければ、われわれ人間は、ほとんど人間らしい活動はでき得ないだろう。そこにあるのは、いわば本能的な（或いは動物に極めて近い）活動だけになってしまいうだろう。そして、ある人が、毎日、休みなく「頭の中」や人との話のなかで使っている言葉というものは、おのずからその人の「精神」を形づくっているものであり、それゆえ、使う言葉がいいかげんである、あるいはあいまいであるとすれば、それは、その人の精神がま

だ「未熟」であるとも、それほど大きな誤りにはならないだろうと思う。つまり、それだけ「言葉」と「人間」との関係は、極めて親密かつ微妙であり、どこまでも深くからみ合い、切っても切れない「不可分」な関係にあると言えるものである。

また、若い時には、とかく自分の思っていることと口から出てくる言葉とが、かなり食い違ってしまうことも多く、自分でも、「なんでこんなまずい受け応えにならないのか」、あるいは「なんでこんなまずい受け応えしかできないのか」、自分でもあきれてしまうことが多々あるかと思う。その理由としては、むろん、話をすることにまだ十分に慣れていないからであるが、それに加えて、「言葉」が、まだ「借りもの」であり、使う言葉が、その人自身のなかで十分に消化されて、いわば「自分の言葉」になっていないからである。つまり、自分と使う言葉との間には、かなりの「距離感」（隔たり）があるからである。しかし、それも、やがて人間として真に「成長・成熟」してくれば、次第に使う言葉との間の距離感もうすれ、自分の「思いや考え」などを、大体、思い通りに言葉で表現できるようになるものである。また、そうなることが、人間としての一つの大きな「成長・成熟」でもあると言えるものである。

一方、相手の話していることが、果たしてほんとうのことなのか、それともうそを言っているのかは、なかなか判別しがたいものであるが、しかし、話をしてる当人には、自分がうそをついているのか、ほんとうのことをいっているのかは、はっきりと自覚を持って話していることがふつうであるから、自ずとその人の「心の動き」が、その人の使う言葉にも微妙に反映されるものである。つまり、使われる言葉は、それを使う人の「心の動き」を受けて、表に現われて来るものであり、それゆえ、必ず、その人の「心の動き」を何らかの形で反映しているものであり、相手の「顔の表情や動作」などはもとより、その人の使う微妙な「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の強弱なり、言葉の内容なり」を、じっくりと深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」、深く厳密に識別する、そうすれば、ある程度は、その「真偽」を判別することもでき得るのかも知れない。——例えば、孔子の「六十にして耳に順う」という有名な言葉があり、それにも幾つかの「解釈」があるかと思うが、その一つとして、相手の微妙な「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の強弱なり、言葉の内容なり、その他」などを深く厳密に聴き分けているだけで、その人の『人となり』というものが自ずと見えて来るというものである。また、よく相手の身になって考えてみるという言葉があるが、それは、対象を「内から観る」（つまり「対象そのもの」になりきってその対象を内から観てみる）という見方であるが、そのような「見方」なども、ある程度までは、相手の「心を読む」ことができ得るのかも知れない。とは言え、やはり、現実には、相手の人がどこまでほんとうのことを言っているのか、それとも、うそをついているのかを、はっきりと判別することは、なかなか難しいことになるのだろう。

二、話をする

次に、「話をする」というのは、ほとんど「おしゃべり」と同じようなものである。ただ、「話をする」というのは、ある程度、まとまった内容を相手に伝えるということであり、それゆえ、話す内容に応じて、やはり、それなりに言葉を選び、正確さを期し、時に

は厳密さが要求されることにもなるのだろう。だとすれば、「話をする」というのは、比較的軽い「おしゃべり」とは少し違って、自ずとその言葉には、それなりの「重み」が加わって来るものである。つまり、「言葉」というのは、一般的に言つて、正確に使えば使うほど、あるいは厳密さを期せば期すほど、それだけその言葉に「重み」が加わって来るものである。それゆえ、「言葉」というものを、あいまいに、いかげんに使用している限りは、相手に自分の思いを正確に伝えることも、人の心に強く訴えることも、また、相手の人を説得することも、あるいは話に「重みや真実味」などを持たせることも、なかなかできにくいということである。

さて、「話をする」と言つても、いろいろな場合があるかと思う。その代表的なものとしては、例えば、二人の人が様々な問題について、お互い自分の「考えや想い」などを語り合う、いわゆる「対談」形式もあれば、また、ある「テーマ」などを定めて、その「テーマ」に基づいて、何人かがお互い活発に自分の「考えや意見」などを述べ合う「座談会」や「討論会」、或いはまた、「シンポジウム」などもあるかと思う。

また、ある持ち時間、一人の人がずつと話をし続ける場合もある。例えば、各分野の人たちの「講演会」や各種の「説明会」など、また、選挙中の「街頭演説」や「立ち会い演説会」など、また、学校では、朝礼での校長の話があったり、教室では先生の授業やホームルームなどでの話もあり、また、会社では、様々な会議での説明（報告）やら、朝、社員を集めて、その前で話をする場合もある。また、大小様々な「催し」や「集い」などがあれば、必ず、その「催し」や「集い」の代表者たちの「あいさつ」や様々な「話」などがあるかと思う。また、結婚式や披露宴での「スピーチ」などもあれば、また、それはもうどういふ場合であれ、ひとがたくさんいるところで、つまり、人前で自分の「考えや意見」などを述べる場合もあり、また、テレビやラジオなどでは、いろいろな人たちが様々な「おしゃべり」や「話をする」ことなどを行なっているものである。そして、その「話」の内容も、ごく日常的なことだから、かなり専門的な問題にいたるまで、非常に幅広いものがあり、それゆえ、極めて軽い「おしゃべり」から極めて専門的な「話をする」ものまでが、極端に入り交じっている状態ではないかと思う。

そのように、人間が二人以上集まれば、そこには、必ず「おしゃべり」や「話をする」という状態が生じて来るものであり、それはもちろん、われわれ人間が、主に「言葉」を使つて、お互いの「意志疎通」を行なっているからであるが、そこで交わされる様々な「言葉」には、もちろん、うそもあれば、誇張もあり、あるいはまったくいいかげんなものもあるだろうから、そういうものにあまり意味なく振りまわされないためにも、相手の「言葉」をよく「聴き分ける」ことが、何よりも大事なことになるのだろう。

一方、自分の「考えや想い」などを相手に伝えようとするためには、ふつう「言葉」を使つて行なうものであるが、その場合、話す「事柄」（内容）などによつても違つて来るだろうが、とにかく、それなりに言葉を選び、そして、正確さや厳密さを期せば期すほど、それだけ話す「内容」に重みや説得力が加わるのが、ふつう一般的ではないかと思う。また、「話をする」というのは、比較的軽い「おしゃべり」とは少し違って、ある程度、まとまった「内容」を相手に伝えるということであり、それゆえ、話す「内容」に応じて、やはり、それなりに言葉を選び、正確さを期し、時には厳密さが要求されたりするものであるから、比較的軽い「おしゃべり」の時よりは、自ずとその「言葉」には、それ

なりの「重みや責任」などが加味されることにもなるのである。

三、文章を書く

最後に、「文章を書く」ということであるが、その「文章」というものは、この世の中にはもう実にいるいろいろな形式の「文章」があるかと思う。……

例えば、はがきや手紙あるいはメールなどに書く文章や日記などに書く文章、また、ビジネスなどにおける事務的な「文章や書類」などの場合、あるいは、「新聞、雑誌、書物、その他」などに記載する文章（原稿）を書くような場合、また、研究成果などを記録したり、何らかの「論文」などの文章を書くような場合、また、学生のノートをはじめ、様々な作文やレポートなど、あるいは人の話や自分の考えなどをちよつとメモるために書くようなものまで、もう実に様々な文章があるかと思うが、ここでは個人的な比較的「軽い文章」ではなく、いわゆる「本格的な文章」について、少し話をしてみたいと思う。

さて、それが「本格的な文章」ということになれば、恐らく、一つ一つの言葉を慎重に選び出し、文章を厳密に組み立て、そして、何度も「吟味」を重ね尽くしては、その人なりに「これでよい」というものになっているだろう。そして、「これでよい」という状態になったということは、一体、何を意味するのかと言えば、それは、その人の「心の想い」と「文章の内容」とがそれなりに一致しているということであり、もちろん、完全に一致することは、極めて難しいことではあるが、それでもまあまあその人なりに納得のいくような状態になったからこそ、まさに「これでよい」ということになるのだろう。

つまり、「書き言葉」というのは、「話し言葉」とははっきりと違って、必ず、何度も「吟味を重ね尽くしたもの」であり、それゆえ、それだけその「文章」には、必ず、その人なりのまさに深い「思いや考え或いは人となり」というものが、しっかりと表れているものであり、それが、まさに「文は人なり」という言葉の「真意」になるかと思う。

四、結び

以上、われわれ人間は、ふつう「言葉」を使って、いわゆる「意思疎通」を行なうものであるが、それには、極めて軽い「おしゃべり」から、かなり専門的なことについて「話をする」場合まで、と、また、文章によって自分の「思いや考え」などを表現する場合とがあり、そのどちらの場合であれ、使われる言葉というのは、必ず、それを使う人の「心の動き」を受けて、外に現われて来るものであり、それゆえ、「言葉」と「人間」との関係には、切っても切れないほど深い関係があるということである。

つまり、使う言葉がいかげんであったり、あいまいであったりするのは、すなわち、その人の「思考や心情」などがいいかげんであったり、あいまいであったりするからであり、また、その人が、毎日、休みなく「頭の中」や人との話のなかで使っている「言葉」こそは、まさにその人の「精神」を形づくっている最大の「構成要因」（つまり「頭の中」で使っている「言葉」こそは、そのままその人の「精神」を形づくっているもの）であり、それゆえ、いいかげんで、あいまいな言葉ばかりを好んで使っていたのでは、いつまで経っても、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密にとら

えることはできにくいということである。それゆえ、「言葉」というのは、できるだけ「正確かつ厳密に使う」ことによつてこそ、初めて、物事を、より正確かつ厳密に「判断し、評価し、認識する」ことができ得るようになるということである。——だからこそ、「言葉」などは、どうしてもよいと思つてゐる限りは、恐らく、その人の人間としての真の「成長・成熟」というものは、半永久的に期待できないだろうし、それだけ使われる「言葉」とそれを使う「人間」との間には、本人にもどうにもならないほどの極めて深い関係があるということである。

*

*

読書とは

読書とは

——想うに、われわれは、一体、何のために、また、なにゆえ、本を読むのだろうか？

それは、やはり書かれている内容やストーリーを楽しんだり、また、あれこれ知識を得たり、その他、もろもろのことでしょう……。

もちろん、その通りかも知れないが、しかし、本を読むというのは、その書物と交わることでしょう。

ええ、もちろん、そうですね。

「交わる」というのは、心を「通わす」ことでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

心を「通わす」相手はなんだろうか？

それは、もちろん、本でしょう。書物でしょう。

もちろん、本であり、書物であるでしょう。

それでは、本は何で書かれているだろうか？

それは、もちろん、言葉でしょう、文字でしょう。

もちろん、「言葉」であり、「文字」であるでしょう。

しかし、言葉や文字は勝手に本の中に存在するのではないだろう。誰かがそれらをつなぎ合わせるのだろう。

そのつなぎ合わせたものが「文章」となっていくのだろう。

もう少し詳しく話してみたいと思うが、

幾つかの単語と単語をつなぎ合わせたものが「文章」となっていくのだろう。

ええ、まあ、そうですね。

しかし、幾つかの単語と単語が勝手につなぎ合うわけがない。

誰かがそれをつなぎ合わせるのでしょう。

幾つかの単語と単語をつなぎ合わせて文章にするのは、

誰でもない、書き手であるでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

また、その書き手は、
でたらめに幾つかの単語と単語を結びついたりはしないだろう。
そんなことをしたらちんぷんかんぷんになってしまいうでしょう。
何がなんだかさっぱりわからない文章になってしまいうでしょう。
幾つかの単語と単語を結びつけて文章にするのは、
そこに何らかの意味をもたせようとするからでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

——どういう意味をもたせるにしろ、
それは、書き手の「精神の働き」であるでしょう。
幾つかの単語と単語を結びつけて文章にするのは、
書き手の精神であるでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

——そして、幾つかの単語と単語とが
書き手の精神によって結びつけられ文章となるとき、
そこには何らかの意味が生じる、あるいは書き手は、
そこに何らかの意味をもたせようとしている。そうだね。

ええ、まあ、そうですね。

単語というのは、もちろん、夜空に輝く星の数ほどはないにしろ、
かなり膨大な数にのぼるでしょう。その膨大な数の単語の中から、
ある特定の単語を選び出してそれらを選びつけ、そして、ある
文章にするのは、作者の精神の働きであるでしょう。膨大な数の
単語の中から幾つかの単語を選び出してそれを結びつけ、そして、
ある文章にするのは、すべて作者の精神の働きであるでしょう。

ええ、まあ、そうですね。

——だとすれば、
幾つかの単語と単語とを結びつけて「文章」にする。その場合、
その一つ、一つの単語と単語とを結びつけているのは、作者の精神でしょう。
その一つ、一つの単語と単語との間に流れているのは、作者の精神でしょう。

その文章の背後或いはその底に流れているのは、作者の精神でしょう。……

ええ、まあ、そうですね。

——ならば、本を読むというのは、まさに

その作者の精神とめぐり逢うということでしょう。あるいは、

その作者の精神とふれ合うということでしょう。あるいは、

その作者の精神と深く交わるということでしょう。

ええ、まあ、そうかもしれません。

——本を読む。何度も何度も深く読む。暗唱できるほどに読む。

それは、作者の精神と自分の精神とか一つになるということでしょう。

それは、作者の心情と自分の心情とが一つになるということでしょう。

ええ、まあ、理屈の上ではそうなるのかもしれませんが。

もちろん、一つになるということは極めて難しいことであるが、

しかし、作者の精神と自分の精神とは深く交わっている。

作者の心情と自分の心情とは深く溶け合っている。

そういうことにはなるよね。

ええ、まあ、そうですね。

——だとすれば、

本を読んで楽しむというのは、まさに

その作者の精神と自分の精神とが深く交わって、楽しむ。

その作者の心情と自分の心情とが深く溶け合って、喜ぶ。

そういうことになるでしょう。だとすれば、書物（本）を読んで、

その表面的な内容やストーリーを楽しんだり、あるいは知識をあれこれ得たりすることとは、少し違って来るだろう。

ええ、まあ、そうかも知れません。

——本を読む。本を深く読むというのは、

いわゆる表面的な内容やストーリーなどを楽しんだり、

あるいはあれこれの知識を得たりすることだけではなく、

実は、作者の精神と深く交わって、楽しむ。

作者の心情と深く溶け合って、喜ぶ。

それは、作者の「精神」と自分の「精神」とが親しく心を通わし、

深く交わるという、いわば「書物」を友とすることであり、

——読書の楽しみというのは、

作者の「精神」と深く交わって、楽しむ。

作者の「心情」と深く溶け合って、喜ぶ。

本来、そういうことであると言ってもよいのだろう……。

でも、嫌いな作家（書き手）であれば、その作家と深く心を通わすという

ようなことは、できにくいんじゃないでしょうか……。

——本を読む。何度も何度も繰り返し繰り返し深く読む。そういう「書物」は、その人にとって嫌いな作家（書き手）のものであることはふつう少なく、やはり好きな、あるいは興味惹かれる作家（書き手）であることが多いのだろう……。また、一般に「本」を読みさえすれば、それが即「読書」であると思っている人は非常に多いけれども、「読書」というのは、その「書物」と深く交わるということであって、その「書物」を一度読めば、あるいはその内容が分かったからそれでもうよいというものではなく、何度も何度も繰り返し繰り返し深く「読む」ことによつてこそ、初めて、その作者の「魂の鼓動」が生そのまま聴こえて来るということであり、そして、その作者の「魂の鼓動」（つまり「魂の声」）を生そのまま聴くということこそは、すなわち、真の「読書」になるのである。

——話を少し前にもどしたいと思うが、

単語というのは、もちろん、夜空に輝く星の数ほどはないにしろ、

かなり膨大な数にのぼるでしょう。その膨大な数の単語の中から

ある特定の単語を選び出し、それを結びつけ、そして、ある

文章にするわけだが、それではなぜほかの言葉ではなく、その言葉を

使って文章にしたのか、また、どうしてそのような言葉の組み合わせにしたのか、

あるいは、なぜある思いなり考えなりを表現するのに、他の表現方法ではなくて、

このような文章表現にしたのか、その他、それらはすべて作者の精神の働きであるでしょ

う。——つまり、「文章」作成にあたっては、ふつう何度も何度も繰り返し、ああでもな

いこうでもないといろいろ想いをめぐらし、想を練り直しては、ここはこういうふうにし

たほうがよいとか、あそこはあの言葉ではなく、この言葉を使った方がよいとか、その他、

そういうふうにあれこれと何度も繰り返し繰り返し吟味を重ね尽くした末に、恐らく、そ

の人なりに「これでよい」というものになっているのだろう。ならば、その文章には、

必ず、その人なりの「思い」が込められているであらう。

必ず、その人なりの「考え方」があらわれているであらう。

必ず、その人なりの「心情」が語られているであらう。

必ず、その人なりの「人となり」が表れているであらう。

そして、その文章の中に深く溶け入っては、多種多様に表現されている、その「言葉の流
れなり、言葉の抑揚なり、言葉の真意なり、言葉の姿・形」というものを、じっくりと深
く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」、そうすれば、
作者の「魂の鼓動」がまるで生のまま聴こえて来るだろう。今はもうこの世には存在しな

い昔の優れた「作者」の精神とも深く交わることができ得るだろう。つまり、「読書」というのは、表面的な内容やストーリーを単に楽しむだけでなく、また、あれこれの知識を得るといっただけでもなく、その文章の中に深く溶け入っては、その「言葉の流れなり、言葉の抑揚なり、言葉の真意なり、また、言葉の姿・形」というものをじっくりと深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」、そして、その作者の「魂の鼓動」（つまり「魂の声」）をできるだけ生のまま聴くということである……。

でも、内容やストーリーを楽しむのも、決して悪いことではないでしょう……。

もちろん、悪くはないでしょうが、しかし、ただ表面的な内容やストーリーだけを楽しむのであれば、それは、いわば「影」に酔うことであるといってもよいのだろう。もちろん、そうだと知っていて、それを楽しむのであれば、それは、それで十分に楽しめるものではあるだろうけれども……。

それにまた、あれこれの「知識」を得たりすることだって、別に悪いことではないでしょう……。

もちろん、悪くはないけれども、それは、「読書」ではない。

それは、いわば「調べもの」であると言ってもよいのだろう。

自分が欲している「知識」をその本の中から選び出すのですから……。

もちろん、本を読めば、誰だって知らず知らずのうちに、

その作者の精神とふれあい、そして、それなりに交わっているだろう。

それは、誰だつてそうであるでしょう。それではどこがどのように違う

というのだろうか？ それは、いわゆる「深さ」が違うのです。

その作者とどのくらい「深く」交わったのか？

人によって、その「深さ」がみな違って来るだろう……。

——本を読む。例えば、ゲーテは、次のようなことを言っている。

「みなさんは、本の読み方を学ぶには、

どんなに時間と労力がかかるかを御存知ない。

私は、そのために八十年を費やしたよ。

しかし、まだ今でも目的に到達しているとは言えないな。」（ゲーテとの対話）

ゲーテと言えば、当時までのすぐれた書物、芸術、その他のものを

ほとんど見聴き読みむさぼった人だと言ってもよいのだろう。だとすれば、

——本を読む、ということが、如何に極難であるかを物語っている。

最後に、彼の言葉をそのまま書き留めておきたいと思うが、

「人はあまりにもつまらないものを読みすぎているよ。

時間を浪費するだけで、何も得るところがない。

そもそも人は、いつも驚嘆するものだけを読むべきだ。

私が青年時代にそうしたように……」（ゲーテとの対話）

讀書

読書について

昔から「読書」については実に数多くの人たちが言及している問題であり、それゆえ、新たに何かを書き加える必要もないのかも知れないが、敢えて「読書」について少し詳しく考えてみたいと思う。例えば、今日では、映画、テレビ、DVD、パソコン、スマートフォン、タブレット、その他の「映像」と関わる機会が非常に多くなり、また、新聞や雑誌などを読むことはあっても、一冊の「書物」をじっくりと時間をかけて深く読む機会というものは、一般的に少なくなってきたのだろう。もちろん、それは時代の流れというものであり、それは、それで仕方のないことであるが、それでも近くの書店などに行ってみると、いろいろな書籍類と同じようにそれなりのお客さんが集まっているのを見ると、いわゆる「書物」に対する「興味や関心」などは、まだそれなりに残っていることになるのだろう。

例えば、書店に並べられている膨大な量の書籍類から、どの「本」を選ぶかは、もちろん、各人一人ひとりみな違ってくるだろうが、どの「本」を選ぶにしても、「本」との出逢いは、「人間」との出逢いと同じように何とも不思議なめぐり合わせではないだろうか。というのも、「本」との出逢いも、また、「人間」との出逢いも、その後のその人の人生に計り知れないほどの大きな影響を与えることが極めて多いからである。換言すれば、どのような「書物」とめぐり逢うか、また、どのような「人間」とめぐり逢うかによって、その人の一生が、ほぼ決まると言ってもよいほどの意味合いがあるということである。

例えば、「人間」との出逢いの場合、家族や親戚をはじめ、学校やそこでの部活動、また、塾や習い事、その他などでの先生や友だち、また、社会人となれば、会社（職場）や趣味などでの様々な人間との出逢い、また、映画やDVD、テレビやラジオ、その他などのメディアを通じての間接的な人間との出逢い、それに男友達、女友達、恋人、その他、それは、老若男女を問わず、どのような「人間」とめぐり逢い、その「人間」とどのように関わり、そして、どのような影響を受けるかによって、その人の人生に測り知れない、むしろ決定的な意味や影響を与えるものである。それと全く同じように、古今東西を問わず、世に存在する膨大な量の「書籍」のなかで、どのような「書物」とめぐり逢い、その「書物」とどのように関わり、そして、どのような影響を受けるかは、その人にとって極めて大きな意味があると言えるものである。そこで書店に並べられている膨大な量の書籍類の中から、どの「本」を選ぶかは、時として、その人にとって「運命的な出逢い」ともなり得るものである。それは、特に若い時にこそ、起こり得ることが多く、その人を「根底から変革させる起爆剤」ともなり得るものである。

それでは、若い時には、一体、どんな「書物」を読んだらよいのかという問題が、いつも生じて来るが、それは、どのような「書物」というよりも、その人が読みたいと思う「書物」を読めば、それでよいものである。しかし、何が読みたいのか、本人にもよく分からないという場合もあるのだろう。そのような時には、例えば、書店に並べられている膨大な書籍類をずっと目で追っていき、そして、何か心惹かれるような「書物」を見つけたならば、それを買って求めたらどうだろうか？ 家に持ち帰って、その「本」を読んでみたら、「なあんだ、自分が期待していたのとは全然違って、ちっともよくない、やっぱり買っただけじゃなかったなあ！」と思うような場合もあるだろう。しかし、それはそれでよいので、

それを部屋にある本棚の中に入れておけばよいのです。その時には、つまらないものを買って、何か損をしてしまったと思っても、あとになって、あの時、なぜ自分は、あの本を選んで買い求めたのか、よく分かる時が、必ずやってくるからである。なぜなら、その本を買い求めようとした時に、「その本にわずかでも心惹かれる」というささやかな心の動きがあったからである。なぜ、どうして心惹かれたのか当人にもよく分からなくても、とにかく心惹かれたということが確かであるならば、それは、その人自身の「心」とその書物との何かとが引き合うところがあつたということである。あるいは、その人自身の「心」が、その人自身にもよく分からなままに欲していた「あるもの」を、その書物は、何らかの意味で宿していたということである。だからこそ、なぜか気になるのであり、また、なぜか心惹かれるのは、その人自身の「心」が、何らかの意味で「興味や関心」を寄せていたものになるからである。すなわち、若い時の「心」というのは、実に様々な好奇心とともに、自分を少しでも成長させたいと望んでいるものであり、それゆえ、その買い求めた「本」が、ただ単なる「好奇心」（つまり興味本位）から心惹かれたものなのか、それとも、その人の心の奥深くに眠っている「本来の自己」が、まさに「自分自身を成長させるため」に求めたものなのか、そのどちらであっても、結局は、同じことであり、心が騒ぐ、また、心惹かれる対象とは、その人自身にとつては、何らかの意味で「興味や関心」があるものであり、そういうものから入っていくしかないだろう。

一方、何も書店で「本」など買わなくても、例えば、近くの図書館から借りて読めば、それで十分ではないかという人もいるだろう。もちろん、その通りなのであり、図書館も大いに利用して、いろいろな本を若い時には数多く読んでもらいたいと思うのです。ただ借りた本は、汚すわけにはいかないと、また、ある期間内に返さなければならぬ制限つきでもあり、じつくりと腰を据えて、長い期間にわたって何度も読み返すことには、あまり向いていないのかも知れない。しかし、むしろ「図書館」も大いに利用して、いろいろな本を数多く読んだり、あるいは何か専門的なことを調べたりする時には、図書館は、どうしても欠くべからず存在になるわけだ。とにかく古今東西の極めて数多くの「書籍」類がずらりと揃っているわけであるから、図書館こそは、まさに膨大な「知識の宝庫」であり、必要に応じてどンドン積極的に利用されたらよいかと思う。

ところで、書店で「本」を買って家に持ち帰ったあと、それをどうするかは、人によってみな違って来るだろうが、まず、購入した日付をその本に書き記しておく、あとになって、その本を何年の何月何日に買い求め、そして、何時ごろ読んだかということが分かって、非常に便利なものなのである。これは、一般にはどうでもよいように思われがちであるが、意外にそうでもなく、後年、ふり返った時に、あの時、あの本を読んだことが、自分の「内的成長」にどのような影響を与えたのか、あるいはどういう意味があつたのか、そういう自己の「内的成長過程」をあとで再確認する上でも、非常に大事なことになるわけである。——さて、新しい文庫を買ってくると、個人的にはペラペラと何度かめくったり、あるいは時には本を閉じたまま軽く揉んだりします。なぜ、そんな馬鹿なことをするのかと言えば、それは、「全体の文面」を見るということもあるが、主に「紙」を柔らかくするためであり、新しい紙は、なんとなく親しみにくいものだからである。つまり、手になじませるために、あるいは手になじむようにそういうことをするわけだが、それだけでも真新しい書物よりも少しでも「親しみ」を感じることが出来るわけである。

というのも、「書物」とのつき合いは、他人行儀のつき合い方であってはいけないのであり、それが自分の「本」であるならば、いたるところに傍線（赤線）や様々な書き込みなどを入れて、どんどん汚していくべきなのである。なぜ、そんなことが必要なのかと言え、それだけその「書物」に対して、「親しみ」がわいてくるからである。そして、気に入った本であるならば、その本がぼろぼろになるまで何度も読み返し、そして、何ページには何が書いてあるかが分かるくらい、その書物と深く交わることも大事なことになるわけである。もちろん、別にそんなことをしなくてもいいじゃないかと言う人もいるだろうし、また、じつくりと「読書」など行なっている時間などないという人も多いのだろう。

もちろん、「読書」というのは、他人から強制されて行なうものではなく、読みたい時に、読みたい「本」を、読みたいだけ読めば、それで十分なものであり、それ以外は、すべて余計なことになるわけだ。しかし、それでもなおこうして話をしたいと思うのは、ほかでもなく、やはり若い人たちには、できるだけ「読書」をしてもらいたいと思うからである。それでは、なぜ若い人たちに本を読んでもらいたいと思うのか？ それは、われわれ人間の、いわゆる「思考（思索）能力」を育てるには、「読書」が最適ではないかと思うからである。そして、若い時の「読書」は、できるだけ多くの書物を読むという「乱読」で十分なのである。しかも、最初から最後まで読まなくても、途中で読むのを止めてもいいし、また、二、三ページぐらいしか読まなくても構わないし、また、全然読まなくても構わないのです。よく「積読」という言葉があり、それは、本を買っても読まない人を皮肉っていった言葉かも知れないが、「積読」というのは、まったく意味がないように思われがちであるが、しかし、意外にそうでもなく、手元に「ある」ということは、いつか「読む」機会が生じることもあり、どんどん「積読」は、しておくべきなのである。というのも、その時には、まったく「興味や関心」を示さなくても、あとになって、「興味や関心」が生じて来ることは、いくでもあることであり、また、手元に「積読」しておけば、ひまな時には、ちよっと手を伸ばして、読んでみようかなあという気持ちにもなるわけで、「積読」は、どんどんしておくべきなのである。

ところで、若い時とは、いったいどういう時期なのだろうか？ それは、「肉体的にも精神的にもまさに成長期」にあたっているわけである。そして、肉体を育てるのに一番よい方法はと問われれば、誰でも、それは、何かスポーツをすることであり、何かスポーツ（或いは「運動」）をすることによって、肉体を無理なく育てるのが一番よい方法だと答えるだろう。そして、それに反論する人は、ほとんどいないだろうと思われる。それでは、われわれ人間の「精神を向上」させるために一番よい方法は、何かと問われれば、それは、人によって実に様々な意見に分かれるだろうが、その一つとして、ここでは「読書」を挙げたいと思うわけである。というのも、われわれ人間のいわゆる「思考（思索）能力」というものを真に育て上げるには、やはり「読書」が最適ではないかと思うからである。

「読書」とは、広い意味では「書ヲ読ム」こと全般のことであるが、若い時には、いろいろなものができるだけ数多く「乱読」しておくことが大事であると思うとともに、狭い意味での「読書」も、それは、一冊の「書物」をじっくりと時間をかけて深く読むことも、その人の「思考（思索）能力」を真に育て上げるには、極めて大事なことになるのである。しかも、それは、娯楽性の強い月並みな「書物」などではなく、真に優れた本格的な「書物」であってほしいのです。というのも、月並みな「書物」では、恐らく、月並みな「精

神」しか学べないだろう。真に優れた「魂」と深く交わることによってこそ、初めて、その人も一人前の「精神」となり得るのである。古今東西を問わず、世に優れた書物は、数多くあるわけだから、その中から、心惹かれるものを選んで読めば、それでよいものである。その場合、ただ一度読めば、あるいは表面的な内容が分かったから、それでもうよいというものではなく、何度も何度も深く読む。その作者の「魂の鼓動」が生のまま聴こえてくるまで深く読んでほしいのです。そうでないと、いわゆる「書物」を深く読んだことにはならないからである。もし、その人の身のまわりに真に優れた「人物」がいるならば、何も本など読まなくても、その人とじかに深く交わることで、その人からいろいろ多くのことを直接的に学ぶことができ得るだろう。しかし、実際には、なかなか真に優れた「魂」とめぐり逢える機会は、少ないだろう。しかし、「書物」であるならば、その人がその気になりさえすれば、いつでもどこでも手軽に古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることができ得るわけで、これ以上のものはないだろうと思う。

それでは、なぜそれほど真に優れた「書物」ということにこだわるのか、あるいは、なぜ真に優れた「魂」と深く交わることが必要だと力説するのかと問われれば、それは、若い時というものが、まさに「肉体的にも精神的にも成長期」にあたっているからである。まさにそういう時期であればこそ、真に優れた「魂」と深く交わることによって、その人の「精神」をしつかりと鍛え、育てておくべきなのである。月並みな「精神」と深く交わっても、恐らく、月並みな「精神」しか学べないだろう。やはり、真に優れた「魂」と深く交わってこそ、その人の「精神」も、一人前の優れた「精神」となり得るのである。もしその人が、自分自身の「精神」(特に「思考(思索)能力」)を真に鍛え、向上させたいと心の底からそう願っているならば、私は、何の躊躇もなく、真に優れた「魂」と深く交わることが勧めたい。そして、真に優れた「魂」と深く交わるのに一番簡単な方法の一つが、まさに古今東西の真に優れた「書物」と深く交わることなのである。

むろん、その人の身のまわりに真に優れた「人物」がいるならば、その人と直接(直に)深く交わることによって、いろいろ多くのことを学ぶことができ得るだろうが、いつも身のまわりに真に優れた「魂」が存在するとは限らないだろう。しかし、「読書」ならば、いつでもどこでもその人がその気になりさえすれば、気軽に古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることができ得るわけであるから、これ以上のものはないだろうと思われる。それに生きている人間というのは、どうしても「生身の存在」であるがゆえに、いつでもどこで何をしでかすか分かったものではないが、すでに死んで評価の定まっている人であるならば、それほど裏切られることも少ないだろうから、すでに評価の定まっている真に優れた「書物」こそ、じっくりと時間をかけて深く読むのがよいわけである。

それでは、真に優れた「書物」とは、一体、どういうものかという問題になるかと思うが、真に優れた「書物」とは、すなわち、真にものを考えさせてくれる「書物」のことだ。なぜ、こんな簡単なことをわれわれは見失いがちなのだろうか。だとすれば、いわゆる「ハウツーものや実用書あるいは娯楽的なもの」は、それとはまったく相反する「書物」ということになるだろう。なぜなら、ものを考えさせるどころか、安易な答えや要領などを与えたり、あるいは真にものを考えることを娯楽は妨げることを行っているのだから。もちろん、「ハウツーものや実用書あるいは娯楽的なもの」が、つまらない本などと言っているのではなく、ハウツーものや実用書などは、実社会で生きていく上で必要な知識や要領な

どを教えてくださいるものであり、それは、非常に便利であり、役立つことも極めて多いわけである。また、娯楽的なものも、われわれ読む側をいろいろ楽しませてくれるわけであるから、それらも必要不可欠なものなのである。ただ思うに、いわゆる「ハウツー」ものや実用書あるいは娯楽的なものは、狭義の「読書」（つまり真の「読書」）には、やはり不向きな書物になるということである。なぜなら、真の「読書」に向いているのは、真にもものを考えさせてくれる「書物」であり、それは、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などが深く眠っている、いわゆる「根源世界」へと誘うものであり、読者は、その「根源世界」から湧き出ている「源泉」の澄んだ水を飲むことによって、いわば「心の渇き」を深く満たすことになるからである。つまり、真に優れた「書物」というのは、読者を既成的な知識に満ちた「下流」から、目を「上流」へと向けさせ、そして、物事の湧き出づるまさにその「源泉」へと誘うものなのである。

一、読書の方法

ところで、若い時には、いろいろな「書物」をできるだけ数多く「乱読」しておくことを勧めたいと思うわけである。その「乱読」というのは、それほど深く読むというものではなく、ごく一般的に読んで意味や内容を理解すれば、それで十分なものであるが、これは、若い時（特に中・高・大学時代）にこそ、やっておくべきことなのである。若い時には、この意味合いがよく分からないものであるが、しかし、その後のその人の人生に極めて大きな意味を持って来るものなのである。そして、大学時代には、かなり時間を持って余している人たちも多いかと思うが、この時期にこそ、じっくりと腰を据えて、何か真に優れた本格的な「書物」を深く読んでほしいと思うわけである。ただ、あまり無理をして本ばかり読んでいると、精神衛生上あまりよくないので、各人が自分のペースで余裕を持ってゆっくりと行なえば、それでよいことである。そして、書物を読んでいて、特に気に入った箇所や心惹かれる文章などにぶつかった時には、そこに傍線（赤線）を引いたり、ノートに書き写してみることがも大事なことなのである。確かに、傍線（赤線）などを引いて、大事な書物をあちこち汚すのは、好きではないという人も多いかも知れない。しかし、その書物とできるだけ深く交わり親しむためには、よそ行きのつき合い方では、どうしても交わりが浅くなるので、自分の書物であるならば、もうどんどん傍線（赤線）や書き込みなどを入れて汚すべきなのである。なぜなら、そうすることによってこそ、書物との交わりが、より深まり、それだけ親密さを、より増すことになるからである。

また、気に入った文章を書き写すことに、一体、どういう意味があるのだろうか？ それは、ただ単に読むだけではなく、自分の手でもう一度「その文章」を一字一句丁寧に書き進めることによって、その文章の内容をより深く理解でき得るとともに、その魅力的な「文章表現」のいわば「秘密や秘訣」などを学び知ることにもなるのである。つまり、それは、絵画における「模写」とまったく同じことであり、なぜ、画家は、気に入った他人の絵を、もう一度、自分の手でそっくり描き進めるような「模写」などを行なうのだろうか？ それは、いわゆる「模写」することによって、その絵をただ単に外から見て理解するだけではなく、実は、その絵を「内から観て」理解するということであり、それは、わが身を以ってその絵の細部の微妙なところまで深く厳密に理解することになるのである。——つまり、

その絵の「制作過程」（真つ白なカンパス状態から完成された状態まで）を、自分の手で描き辿るといふ「追体験」をすることによってこそ、その絵の作者の「制作過程」での実に様々な「秘密や秘訣」などを、まさにわが身を以って学び知ることになるのである。

また、昔は、よく有名な古文の文章を「暗唱」させられたりしたものである。それには、一体、どういう意味があったのだろうか？ それは、ある「文章」をそのままそっくり「暗唱」することによって、最初は、その正確な「意味合い」はよく分からなくても、まず、その文章の持つ「雰囲気やリズム」などになじむことになる。そして、何度も声に出して「暗唱」したり、「心の中」で「暗唱」することが多くなれば、自ずとその文章のなかに深く溶け入っては、その文章の「言葉の流れや抑揚」などを、そのままわが身を以って内から感じ知ることになるとともに、それは、まさに「作者の心」と「自分の心」とがより深く溶け合い、自分自身がその作者の「心情」となって、その文章を見ることができるようになるのである。——つまり、「暗唱」とは、読者が「ある文章」とほんとうに深く交わるための極めて有効な方法であるとともに、その「作者の精神」（心情）とも深く交わり、また、深く理解するための極めて有効な方法の一つになるということである。

さて、文章を読んでいて、何か気づいたこと、あるいは思いついたことがあったら、できるだけノートに書きつけるようにした方がよいのです。それは、どんなに下手な、あるいは断片的な言葉であっても構わないので、とにかく何か思いついたこと、あるいはその時考えたことなどを、どんどんノートに書きつける習慣を、若い人には身につけてもらいたいと思うのです。なぜなら、ただ書物を読むだけでは、まだ半分なのであり、書物を読んでいて、何か感じたことや思いついたことなどがあつたならば、どんどんノートに書きつけておくべきなのである。そうすることによって、自らものを考える習慣が芽生え、育つて来るからである。これは、極めて大事なことであり、書物をただ読むだけではなく、実際に書くことによって、より理解を深めることになるとともに、自らものを考えるという真の「思考（思索）能力」が芽生え、育つて来るものであり、これこそ、真の「読書」によって得られる最大の利点の一つなのである。なぜなら、真の「読書」とは、あれこれの知識を得ることが、真の目的ではなく、むしろ、最終的には作者の「魂の鼓動」（「魂の声」）を生のまま聴くことではあるが、それとともに、自ら物事を深く厳密に考えることのできる、真の「思考（思索）能力」を養うことにもなるからである。われわれは、特に若い人の場合、自ら物事を深く考えて、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることは、まだなかなかできにくい段階であり、多くの場合、人から聞いたことや何かで読みかじった他人の意見などを、そのまま自分の意見のように思つて使つていくことが多く、自ら物事を深く考えるという「思考（思索）能力」は、まだ不十分な段階なのである。しかし、書物を読んで、そこで感じたことや思いついたことなどをノートに書きつけるようにすれば、自らものを考える習慣というものが芽生え、育つて来るわけであるから、若い人には、ぜひともただ本を読むだけではなく、思いついたことをどんどんノートに書きつけることを勧めたいと思うわけである。

そして、そのノートに書き留めたものを、何度となく読み返してみること、極めて大事なことなのである。読み返してみると、その時は、そう思ったことでも、あとで読み返してみると、自分でも赤面するような内容のものもあるだろうし、また、時には、なるほどと関心するようなものもあるかも知れない。たとえそれがどういふものであれ、そこに

書き留められているものは、他人の考えでも他人の意見でもない、自分の力で考えた自分の文章、自分の言葉、自分の考え、自分の思い、自分の意見、自分の思想、自分の感性、自分の価値観、自分の道徳観や倫理観、自分の人生観、自分の判断、自分の志向、自分の性格、その他、そういうものに満ちているわけである。むろん、それは、まだ磨きのかかっているかも知れない。それは、それで少しも構わないのです。なぜなら、初めて自分の「思いや考え」などを誰の目も気にせず、思う存分に書き記した文章や断片的な言葉に満ちているからである。そして、何度ともなく読み返しているうちに、ここは、こういうふうにしたほうがよいとか、ここでは、この言葉ではなく、この言葉を使って表現した方がよいとか、これは、ずいぶん勘違いをしているなあとか、あの時は、そう考えたけれど、今ならこう考えるとか、また、あの時は、こういうふうに表示したが、今ならこういうふうに表示するだろう。あるいは、あの時は、ああいうふうに感じたけど、今ならこういうふうに感じるなあとか、あの時には、ああいうふうに言っただけど、今ならこういうふうに言うだろうとか、あれこれ思いめぐらすことができるわけである。

それでは、そういうことにいったいどういう意味があるのかと言えば、それは、その当時の、その人の「内的世界」と現在のその人の「内的世界」との比較対照ができるということである。そして、比較対照することによって、自分がどのように成長してきたか、また、自分がどのように変化してきたか、あるいは自分がどのように向上してきたかが、はっきりと分かるということである。あの時、わからなかったことも、今ならよくわかる。あの時、理解できなかったことも、今ならほぼ理解できる、というように、自分の「内的成長過程」を目的^ま、あたりに^す、することができるようである。そして、何度も読み返し、その時に、思いついたことや考えたことなどを、新たに書き記す^{しる}ことも、何度も繰り返しることによって、自らものを考える力や判断する力、また、自ら物事を評価する力や認識する力なども育つて来るのである。つまり、ただノートに書きつけるだけでも、自らものを考える習慣が芽生え、育つことにはなるが、それに加えて、何度も読み返すことによってこそ、さらに自ら物事を「判断し、評価し、認識する」力も芽生えさせ、育てることにもなるわけである。だからこそ、書きつけるだけではなく、読み返すことが、より大事なことになるわけである。——それでは、「読書」とは、本を読み、想いついことを書き留め、それを読み返し、新たに自分の「考えや想い」などを書きつけるだけで十分かと言えば、もちろん、それだけではまだ十分とは言えないのである。それでは、それ以外にいったい何があるのかと言えば、まだまだいろいろとあるのである。

二、狭義の「読書」

むろん、「読書」というのは、その人が読みたいように読めば、それで十分なものであり、われわれがとやかく言う問題ではないのかも知れない。それゆえ、あくまでも参考までに狭義の「読書」について、順を追って話をしてみたいと思う。——それでは、その狭義の「読書」とは、いったいどういうものであるかを少し書き加えてみたいと思うが、まず最初は、どういう場合でも、とにかく「一読」「通読」してみることなのである。つまり、取りあえず、最初から最後までひと通り読み通してみることである。そして、この時

には、文章の意味や内容がよく分からないところがあっても、少しも構わずどんどん読み進んで、とにかく、一度は、最初から最後まで軽い気持ちで読み通してみることによって、一体、どういことが書かれているのか、その内容を大ざっぱにつかめば、それで十分な段階である。むしろ、その時に、気に入った文章や重要だと思える箇所があれば、傍線（赤線）を引いたり、書き込みを入れたり、また、想いついたことや考えたことなどをノートに書きつけたりすることも、「一読」「通読」だからと言って、遠慮せずにどんどん積極的に行なってほしいのです。そして、そのようにして、「一読」「通読」がひとまず終わつたならば、今度は、本格的な「精読」の段階に入っていくことになるわけである。

さて、その「精読」の段階であるが、それは、できるだけ一字一句しっかりと理解しながら、前に進んでいくものである。できれば、その文章の意味だけではなく、言葉の流れなり、言葉の強弱なり、言葉の抑揚なり、言葉の姿・形なども、深く味わってもらいたいと思うが、それは、「味読」のところでは話をしたと思うので、ここでは省略したいと思う。そして、書物を読んでいて、どうもよく分からない箇所、また、内容がよく理解できない箇所が出てくるかと思うが、その時には、何度かその箇所を読み返してみても、どうしても理解できない時には、それはそれとして、その場でよく理解できなくても、それほど気にすることはないので、それは、そのままにして前に進んでいけば、それでよいことである。そして、あとになって、あれは、一体、どういう意味だったのか、時々想い出して考えてみることも、何より大事なことになるわけである。それは、「心の中」に何か未だ解けない問題や疑問点などを幾つか蓄えておくということであり、「……あれは、一体、どういう意味なんだろうか、あれは、一体、どういうことなんだろうか」というように、「心の中」に幾つかの疑問や問題点を蓄えておき、時々そのことを想い出しては、あれこれ独り考えてみることも、極めて大事なことになるわけである。

それは、何かを見たり、聞いたりしながら、それに沿ってものを考えたり、また、他人と話をしながら、それに沿ってものを考えるという場合とは違って、その人の「心の中」で孤独「自問自答」を果てしなく繰り返すことであり、それこそは、まさに「純粹思考」（純粹思惟）であり、その時、その時に対応するためにものを考えるという、いわゆる「実践的思考」とは違って、その人の「心の中」で孤独「自問自答」を果てしなく繰り返すことこそ、まさに「純粹思考」（純粹思惟）であり、それは、現実的な諸問題について臨機応変に対応するための「思考（思索）活動」ではなく、むしろ「冥想」に近いものである。つまり、独りぼんやりと「心の中」に蓄えられている幾つかの疑問や問題点などを思い浮かべては、「……あれは、一体、どういう意味なんだろう、あれは、一体、どういことなんだろう」というように、取りとめのない「思考（思索）活動」であるが、その取りとめのない「思考（思索）活動」こそは、まさに「純粹思考」（純粹思惟）であり、その人の「心の中」で孤独「自問自答」を果てしなく繰り返しては、問い直すことなのである。そして、そういうことを行なっていると、「……あつ、あれは、こういう意味だったのか、あつ、あれは、こういうことだったのか」と、ハッと思い至ることがよくあるわけである。つまり、「心の中」に幾つかの疑問や問題点を蓄えていて、時々そのことを想い出しては、あれこれ考えてみることによって、その時には気づかなかつたこと、あるいはよく分からなかつたことが、ある日、ある時、何らかのきっかけで、ハッと思い至ることがよくあるわけである。「……ああ、あれは、こういうことだったのか、ああ、あ

これは、こういう意味だったのか！」と、ハッと思い至ることがよくあるわけである。そして、そういうことを繰り返すことによってこそ、自らものを考えるという真の「思考（思索）能力」そのものが、確実に育っていくことになるのである。

例えば、ある学者が、或る「研究テーマ」を決めて、あれこれ深く研究をしていけば、どうしてもよく分からない様々な「疑問や問題点」にぶつかることが、非常に多くなるかと思う。その場合、学者は、その疑問や問題点を「心の中」に蓄えておき、事あるごとにそのことを思い出しては、あれこれ深く考え、思いをめぐらすという「自問自答」を「心の中」で果てしなく繰り返し返すことになるかと思う。そして、ある日、ある時、何らかのきっかけから、突然、今までどうしても解けなかった難題が、パッと解ける瞬間を迎えることにもなるわけである。——例えば、アルキメデスという人は、ある日、大衆浴場にゆったりとつかっていた時に、「あつ、そうか！」という感じで、ハッとあること（つまり「浮力の法則」）に気づいたというのと全く同じように、いつも「心の中」に幾つかの疑問や問題点などを蓄えておいて、事あるごとに「心の中」で孤独「自問自答」を何度となく繰り返すことによってこそ、やがては人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密にとらえることができるようになるのである。

つまり、「純粹思考」（純粹思惟）というのは、差し迫った「諸問題」に対して、どのように対応して行くかという「実践的思考」とは違って、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを深く厳密に探究して行く時に行なわれる「思考（思索）活動」であり、そして、書物などを読んで、よく分からない箇所、あるいは意味のよく理解できない箇所などを「心の中」に蓄えておいて、事あるごとにそのことを思い出しでは、「心の中」で孤独「自問自答」を何度となく繰り返し返すことによってこそ、ある日、ある時、何らかのきっかけによって、突然、「……あつ、あれは、こういうことだったのか、あつ、あれは、こういう意味だったのか」と、ハッと思い至ることがよくあるわけである。そして、その時、その人は、まさに「自らものを考える」ということを実践していた状態であり、そういうことを何度か繰り返すことによってこそ、その人のいわゆる「思考（思索）能力」は、真に養われ、育っていくことになるのである。

そのように、書物を「精読」していけば、必ずいろいろな疑問点や分からない箇所などにぶつかることになるが、そのような時には、何度か読みなおして、それでも理解できないような時には、無理に理解しようと思わず、その時には、そのままにしておいて、次のところを「精読」していけば、それでよいわけである。そして、よく分からなかった箇所は、「心の中」に蓄えておいて、事あるごとに思い出しては、それをあれこれ考えることによつて、ある日、ある時、何らかのきっかけによつて、突然、それが理解できる日を迎えることができるわけである。そして、真の「読書」とは、まさにそういうことを繰り返し返すことである。だとすれば、いわゆる「ハウツーものや実用書あるいは娯乐的な本」などは、狭義の「読書」（つまり真の「読書」）には、やはり不向きなものになるだろう。つまり、狭義の「読書」に適した書物というのは、あれこれの月並みな内容や読んですぐ分かるような「安易な書物」のことではなく、読んでも読んでもなお汲み尽くせないほどの深みと内容とを宿した「書物」のことであり、そういう真に優れた「書物」をじっくりと時間をかけて深く読むことによつてこそ、その人の自らものを考えるという真の「思考（思索）能力」が真に養われ、育つことになるのである。

そのように狭義の「読書」というのは、一度読めば、それでよいというものではなく、また、表面的な「意味や内容」が分かったから、それでよいというものでもない。それでは、どういふものと問われれば、それは、いわゆる「読書百編」ということである。何度も何度も繰り返し繰り返し深く読み返してもらいたいわけである。そして、それが真に優れた「書物」であるならば、その書物を「読み返す」たびごとに、何か新しい発見が必ずあるはずである。前、読んだ時には気づかなかったことが、今度、読んで初めて気づくということも、よくあることなのである。また、そういうふうには真に優れた「書物」とは、読んでも読んでもなお汲み尽くせないほどの深みと内容とを宿しているものであり、それこそ、まさに真に優れた「書物」と呼ぶにふさわしいものである。

そして、そういう「精読」もひと通り終わつたならば、今度は、その書物を深く味わいながら読むという「味読」や「熟読」の段階に入るわけだが、前の「精読」の段階で、ほぼその「意味内容」を理解できたわけであるから、ここでは、その「文章を深く味わう」ということであり、書かれている意味内容はもとより、その言葉の使い方や言葉の間の取り方とか、言葉の組み立て方、全体の構成の仕方、また、文章の書き方、表現の仕方、言葉の流れ、言葉の強弱、言葉の色艶、言葉の姿・形、文体、その他、そういうものを深く厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」。そして、その作者の精神と深く交わつて、楽しむ。また、その作者の心情と深く溶け合つて、喜ぶ、ということが、まさに「味読」であると言つてもよいのだろう。そして、そのように深く親密に交わつた「書物」というものは、いわば「愛読書」として、手元に大事に置かれることにもなるのだろう。そして、事あるごとに読み返しては、新たな思いや新しい発見などをするかも知れないし、そのようにして時には一生その人の手元に置かれて、その人に大きな影響を与え続けることにもなるのだろう。

三、愛読の極み

さて、ここまでが一般的な「読書」段階であり、多くの人たちが実際に行なっている、いわゆる「読書」というものではないだろうか。それでは、それより深まった「愛読」というのは、いったいどういう段階かと言えば、それは、まさに「精読」や「味読」などの段階が、さらに深まった状態ということである。

例えば、シュリーマンは、ホメロスの「叙事詩」を深く愛読したのであって、「精読」や「味読」の段階で留まつた人ではない。もし、シュリーマンが、ホメロスの「叙事詩」を「精読」や「味読」だけで終わつていたら、彼もまたただの賢い「読者」の一人に過ぎなかつたらう。そして、「こんな作り話やうそなどにはつき合いきれない」と言つて、一笑に付してしまつたかも知れない。しかし、シュリーマンは、あくまでもホメロスの「叙事詩」を深く愛読したのであって、書かれている内容が作り話やうそであるなどとは露ほどにも考えなかつたし、また、考えたこともなかつた。なぜなら、それは、自分をあれほどまで鼓舞してくれた詩人の性格の誠実さを疑うことであり、また、ホメロスという優れた人物に対する最大の侮辱だと考えていたからに違いない。——つまり、書かれている内容をすべて受け入れるか、それともすべて否定するかどちらかだ。書かれている内容が、たとえ作り話であろうと、それをそのままそっくり受け入れることが、

すなわち、ホメロスという「人間の魂」にじかに触れる唯一の道だ。ほかに道はない。シュリーマンは、相手を信頼しきった愛読者として、ホメロスの「叙事詩」に推参したのである。もし彼が「精読」や「味読」の段階で留まっていたら、彼もまた賢い「読者」の一人で終わってしまい、彼のその後の様々な有名な「発掘」や「発見」もなかっただろう。

シュリーマンは、ホメロスの「叙事詩」を原語で読みみままで朗々と暗唱することができた。そして、発掘の休憩の合間には、そこで働いていた労働者たちにホメロスの「叙事詩」の一節などを読んで聞かせていたという。これは、極めて重要な意味を宿しているのであり、原語で読みみままで朗々と「暗唱」できたとは、すなわち、それだけ「作者の心」を「自分の心」としていたということであり、そういう意味からいっても、ホメロスの「叙事詩」をシュリーマンほど深く読んだ人は、少ないのだし、また、彼ほどホメロスという「人間の魂」とじかに深く交わった人も少ないのである。まさに「魂の鼓動」を生のまま聴いた数少ない一人なのである。「愛読」とは、そこまでいくことだ。相手を信頼しきって深く交わることだ。たとえ作り話であろうとそうであらうと構わない、書かれているものをそのままそっくり受け入れることだ。これが「愛読」の極致であり、それが「作者の魂」と最も深くじかに交わる唯一絶対の道なのである。自分に都合のよいところは、好んで受け入れ、気に入らないところを読み流してしまう。また、自分に都合のよい知識だけを読みあさることが、どうして真の「読書」となり得よう。そういう自分の小賢しい考えや思いをひとまずすべて置いて、相手を信頼しきった謙虚な気持ちで、その「書物」に推参しなければ、「書物」の方だつて読み手を馬鹿にして、その奥底に深く眠る「真意」を明かしてはくれないだろう。せいぜい表面的な意味内容を明かしてくれるだけである。また、そこまで行かなければ、書物との「運命的な出逢い」とはなり得ないだろうし、また、その人の「内的世界」を根底から変革させるような劇的な「心的事件」なども起こりやうがないのである。——例えば、伊藤仁斎という人は、何年もかけて、『論語』や『孟子』という書物を深く読んだそうであるが、それは、何も通り一遍の意味内容を読み取ろうとしたのではないだろう。伊藤仁斎という人がやろうとしたのは、『論語』や『孟子』という信頼できる書物と深く交わり、そして、その書物を深く厳密に読むことによつてこそ、まさに孔子という人間の「魂の鼓動」を生のまま聴こうと全精力を傾けて取り組んだのである、その結果として、孔子という人間の「魂の鼓動」（つまり「魂の声」）を生のまま聴くことのできた、数少ない学者の一人になるのだろう。

つまり、「愛読」とは、相手の「魂」と深くじかに交わろうとすることであり、書かれている内容のどこどこが誤っているとか正しくないとか、そういう重箱の隅を突くようなつき合い方ではない。それは、「精読」や「熟読」の段階のことだ。「愛読」段階になるとは、そういうところでつまずいて、前に進めなくなるといふ段階ではない。人間は、間違いをおかすこともあれば、思い違いをすることもあるし、また、時代による制約というものもあるだろう。「愛読」段階というのは、書かれている個々の文章はもとより、その書物の背後に存在する、作者の大きな「魂」とめぐり逢い、そして、その大きな「魂」とできるだけ親密に交わろうとすることである。

例えば、ゲーテの『ファウスト』を深く読んで、その一文章一文章の表現の的確さに今さらのように感心するとともに、『ファウスト』という書物全体のすみずみにまで行き渡っているゲーテという人間の「精神（魂）の躍動」が生き生きと感じられるであろう。「愛

読」とは、そのゲーテの大きな「魂の鼓動」をできるだけ生のまま聴くということである。そして、そのゲーテという「人間の魂」と「自分の魂」とが「書物」を通して、深く交わって、楽しむ。あるいは深く溶け合って、喜ぶ。それが「読書の楽しみ」であり、また、それが、いわゆる「書物を友とする」という言葉の「真意」になるかと思う。

例えば、ある書物を読んでいて、自分の「考えや想い」などに合ったものは、受け入れ、自分の「考えや意見」と違ふところは、受け入れない。それでは、それを生み出したあるがままの「作者の魂」とめぐり逢えないだろう。あるがままの「作者の魂」とめぐり逢うためには、自分のあれこれの「考えや想い」などは、ひとまず置いて、その書物の中に深く溶け入っては、その「作者の魂」と一体となる以外に、いったいどんな方法があるというのだ！ ほかに「いかなる方法」もないのである。

「愛読」とは、そこまで行くことだ。自分のあれこれの「考えや想い」などは、ひとまず置いて、いわば「白紙の状態」になって、その「書物」に推参し、そこに書かれているものを、そのままそっくり受け入れることだ。そして、その文章の中に深く溶け入っては、「作者の心」と「自分の心」とが深く溶け合い、終には「一体となる地点」へと、すなわち、「作者の心」は「自分の心」、「自分の心」は「作者の心」というところまで行くことだ。そして、その地点こそは、まさに人間理解の「究極の地点」であり、その地点を、例えば、伊藤仁斎の言葉を借りて表現すれば、それは、まさに「……其の警咳を承けるが如く、其の肺腑を視るが如く、真に、手の舞ひ、足の踏むことを知らず。……」というように、まさに「人間理解の極致」まで到達でき得るということである。——つまり、「作者の心」と「自分の心」とが深く溶け合い、終には一体となることよってのみ、初めて、作者の「魂の鼓動」(つまり「魂の声」)がほんとうに生のまま聴こえて来るのであり、「作者の魂」とほんとうに深くじかに交わる唯一絶対の道なのである。

だからと言って、明らかに間違っているものを盲目的に信じるということでは決してない。ただ作者の「魂の鼓動」を生のまま聴くためには、まず、「作者の心」と「自分の心」とが深く溶け合い、終には一体となるところまで行って、そこで作者の「魂の鼓動」を生そのまま聴き、そのあとで書かれている内容が正しいのか間違っているのか、じっくりとその「真偽」を深く厳密に行なえば、それでよいことである。そして、その人が、どうしてそういう間違いをおかしたのか、或いは、なぜ故意にそういうことを書いたのか、その他、その人の「心の動き」や「真意」などを深く厳密に探れば、それでよいことである。最初から、「この箇所は、間違っている、これは、うそだ」などと言って、相手を批判しながら、書物を読んでいたのでは、その「作者の魂」と深く交わることなどでき得ないだろう。大事なのは、自分自身が「作者自身」となって、その作者の「心の中」をそのままそっくり生きてみるという、「追体験」をしてみることよってのみ、その作者の「魂の鼓動」(つまり「魂の声」)を生そのままそっくり聴くことができ得るのである。

そして、そういう狭義の「読書」に向いているのは、何度も繰り返し返すように、ハウツーものや実用書あるいは娯乐的な「本」などではなく、数多くある古今東西の真に優れた「書物」の中から、どれでもその人の気に入ったものを選ぶことを勧めているのであり、そういう書物こそ、じっくりと時間をかけて深く読むべきものなのです。そして、真に優れた「書物」というのは、真にものを考えさせてくれる書物であるとともに、読んで読んでもなおお汲み尽くせないほどの深みと内容を宿した書物のことなのである。そして、そう

いう「書物」こそは、若い人たちには、特に大事なものとなるわけである。なぜなら、若い人たちは、物事を「自ら考え、自ら判断し、自ら評価する」ことなどが、まだ十分にできない段階であり、自らものを考えるということを真に養い、育てるためには、狭義の「読書」こそ、もつとも適したものであるからである。

そして、この狭義の「読書」こそは、人間の「思考（思索）能力」を真に育てる最も有効な方法の一つであり、しかも、それは、誰にでもどこでもできる極めて簡単な方法なのである。ならば、まだ「思考（思索）能力」の未熟な若い人たちは、進んで、この狭義の「読書」を行なうべきではないだろうか。特に大学生などは、時間を十二分に持ち合わせているわけだから、この狭義の「読書」は、ぜひとも行なっておくべきなのである。この高度「機械文明」の時代に、本を読むなどは、時代遅れだと思う人もあるかも知れない。本など読まなくても、テレビやパソコンあるいはニューメディアからいくらでも必要な情報や知識などは得られるではないか、なぜ、本を読むなどという陳腐な行為が今なお必要なのかさっぱり分からないと思う人もあるかも知れない。確かに、今後、ますますテレビやパソコンあるいはニューメディアなどが高性能化すれば、本など読まなくてもよい時代が、あるいはやって来るのかも知れない。しかし、自ら「ものを考え、判断し、評価し、認識する能力」というものは、ただ単にテレビなどを受け身的に見聞きしていたのでは、半永久的に育てることなどでき得ないのである。もしその人がほんとうに自分の「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げたいと、心の底からそう願うならば、一生に一度は、この狭義の「読書」を本格的に行なわれなければならない。そして、それを行なう時期は、「肉体的にも精神的にもまさに成長期にあたる」若い時にこそ、そのなかでも、大学生は、十分な時間を持ち合わせているわけだから、できるだけ多くの書物を読みあさる「乱読」とともに、じっくりと腰を据えて、「一冊の書物」を本格的に深く読むという狭義の「読書」を、ぜひとも行なっておくべきだと思うわけである。

四、結び

例えば、乳幼児期には、母親をはじめ、保育園や保育所、或いは幼稚園の人たちと一緒に絵本や童話などを読んだりして、言葉に慣れ親しむ程度でよいだろうし、小学校時代は、読みたい本を読みたいように読んで、書物や文章などに慣れ親しみ、いわば「読書の習慣」を身につければ、それで十分なのである。

そして、中・高時代になれば、自我がはっきりと目覚め、異性への関心も高まり、また、いわゆる「好き嫌い」の激しくなる時期でもあるが、この時期には、できるだけいろいろなジャンルの書物を幅広く読みあさる「乱読」などを勧めたいと思う。というのも、この時期は、学校の勉強や受験勉強、あるいは様々な部活動などで忙しい人も多いだろう。また、様々なものへの好奇心も極めて旺盛になって、一冊の「書物」をじっくりと深く読むよりも、興味や関心を持った様々なジャンルの書物を幅広く読みあさって、その人の「内的世界」をより「拡大・拡充」しておいた方がよいのであり、この時期には、できるだけいろいろなジャンルの書物を幅広く読みあさることを勧めたいと思う。むしろ、一冊の「書物」をじっくりと時間をかけて深く読んでもよい時期ではあるが、それは、もうどちらでも各人にまかせれば、それでよいことである。

そして、大学時代になったならば、できるだけ数多くの書物を読みあさる「乱読」だけではなく、じっくりと腰を据えて、一冊の「書物」を本格的に深く読むという狭義の「読書」を行なうことを勧めたいと思うわけである。というのも、この時期になれば、古今東西の真に優れた「書物」を十分に読みこなせるだけの「知的能力」も備わってくるわけであるから、ぜひとも狭義の「読書」を行なってほしいと思うわけである。むろん若い時には、いわゆる「青春」を思いっきり謳歌したいという気持ちも、非常に強いだろうから、各自それぞれ大いに心ゆくまで楽しんでもらいたいと思うが、それと同時に、自分の「内的世界」を真に育てるための狭義の「読書」もぜひとも行なってもらいたいと思うのです。若い時には、その意味合いがよく分らないものであるが、しかし、そういうことを行なうことによってこそ、その後の、その人の人生に大きな意味を持つてくるわけである。

*

*

例えば、本など読んで、一体、何になるのかという問いに対して、それは、様々な分野の「知識や情報」などが得られることもあるが、それ以上に大事なことは、自分自身の「思考（思索）能力」そのものを真に鍛え、育て上げるためには、まさに「読書」が最適ではないかと思うからである。そのためにも、月並みの書物ではなく、真に優れた「書物」を深く読んでほしいと思うとともに、若い時こそは、一冊の書物との出会いが時として自分の人生を劇的に変える「運命的な出会い」ともなり得るものである。若しも自分自身の「思考（思索）能力」を真に鍛え、育て上げたいと心の底からそう願うならば、私は、何の躊躇もなく、真に優れた「書物」を深く読むことを勧めたい。数年後、間違いなく、その人の「自ら考え、自ら判断し、自ら評価でき得る」という、そういう「思考（思索）能力」というものは、今より遙かに「向上している」ことは間違いないこととなるのである。……

一般的に、世の中は、自分の「力量」でしか見えないものである。例えば、小さな幼児たちは、小さな幼児たちの「力量」でしかこの世の中は見えてはいないものである。それは、つまり、この世の中の実に様々な「表面的な現象」などをあれこれ見聞きしては、それをそのまま「事実」（或いは「真実」）だと思いついておられるということである。しかし、それは、絶えず変化して止まない、いわば「仮相」（つまり「仮の姿」）に過ぎず、もつと奥にある、この世の中の実に様々な人間や物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを真にとらえるためには、それこそは、まさに「実相」（つまり「真の姿」）であるが、それは、自分が真に「内的成長（成熟）」しない限りは、難しいことになるのである。

例えば、プラトンの『洞窟の比喩』というものは、非常に「有名な比喩」であるが、それは、多くの人たちは、壁に映った「影」を見て、それをそのまま「事実」（或いは「真実」）だと思いついておられるのである。しかし、それは、絶えず変化して止まない、いわば「仮相」（つまり「仮の姿」）に過ぎず、もつと奥にある、この世の中の実に様々な人間や物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを真にとらえるためには、それこそは、まさに「実相」（つまり「真の姿」）であるが、それは、自分が真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、真に観て取ることが可能になるのである。そうでなければ、徒然草の仁和寺の法師のように、まさに「山までは見ず」（それは「人生の本堂」を見ること）もなく、この世の実に様々な目先の「欲望や快樂その他」などを貪欲にむさぼることだけで、いわば「自分の人生」を終えてしまうということである。

*

*

ところで、最近は、若い人たちがあまり「本」を読まなくなったということが、よく話題にのぼり、そして、それを心配する有識者たちも非常に多いわけである。しかし、「本」を読みたいという気持ちがあったく生じて来ないのに、無理やり本を読まそうとしても、かえって、その人を「本嫌い」にしてしまうだけだろう。それよりも、若い時には、必ず一度や二度ぐらいは、むしろように「本」が読みたくなる時期が必ず訪れるものであるから、その時にこそ、できるだけ多くの書物を読んでもらいたいと思うとともに、もう一つは、ぜひとも一生に一度は、いわゆる確かな手応えのある「書物」を、じっくりと時間をかけて深く読むという狭義の「読書」を行なってもらいたいと思うのです。その理由は、もう何度も話してきたので、ここでは省略をするが、それとともに、やはり読書の習慣というのは、若い時にこそつけておかないと、大人になってから、さあ、書物を読もうとしても、なかなかなじめないものであり、それゆえ、若い時から、読書の習慣をしっかりと身につけておくことが、大人になってからも、大いに役立つと言ってもよいのだろう。そして、できれば、自分の「心の中」にいえば「心の図書館」を設けて、そして、今まで読んだ本などの内容を簡単に整理して記憶しておけば、必要な時に、いつでも必要な本（と知識）を取り出せるわけだから、まさに「心の図書館」こそは、その人なりに消化し得た様々な「知識の宝庫」であるとともに、その人にとっては、一生の「大きな財産」ともなり得るものではないだろうか。

*

*

映像化時代

目次

映像化時代

- 一、 映像の特徴
- 二、 読書との違い
- 三、 自然と選択を…
- 四、 長所や利点
- 五、 テレビの推移
- 六、 テレビの影響
- 七、 記憶の推移
- 八、 映像の流れとは
- 九、 潜在意識
- 十、 子供への影響
- 十一、 家庭環境
- 十二、 乳幼児から

人間の眼とカメラの眼との違い

- 一、 人間の眼
- 二、 カメラの眼
- 三、 写真の特徴
- 四、 映像の特徴
- 五、 インターネット時代
- 六、 結び

映像化時代

映像化時代

さて、「映像化時代」というのは、今までのような「活字」を中心とした伝達方法ではなく、例えば、映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、動画、(写真)、その他、そのような様々な「映像」(写真)などを使つての伝達方法がより多くなる時代のことである。

一、特徴は

例えば、テレビの場合を例にとつて話を前に進めてみたいと思うが、われわれは、ふつう一画面の映像を正確に理解してから次に進むのではなく、むしろテレビに映し出されて来る「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れていくのだろう。つまり、一画面、一画面の映像を正確に、あるいは厳密に理解してから前に進むのではなく、むしろ「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れていくのだろう。

そして、その「映像の流れ」というのは、次から次へと、例えば、コマーシャルなどの場合には、極めて短い時間に様々な内容なものが、ほとんど無関係に次から次へと流れて来るわけだが、われわれは、その「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れていくのだろう。いわばその「流れ」に身をまかせるといふ形になっているということである。そうでなければ、その映像の意味を理解することができなくなってしまうからである。

例えば、ある一時間番組なら一時間番組を見終わった後、自分は、何を見たのか、ほんの一部しか思い出せないというような場合だつて、時には生じて来るだろう。なぜ、そのようなことが起こり得るのかと言え、それは、「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れてしまっているからである。つまり、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)にしっかりと留まらないうちに、「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れてしまっているからである。それゆえ、一時間番組なら一時間番組を見終わった後、自分は、何を見たのか、ほんの一部しか思い出せないというような場合も、多いということである。

もう少し詳しく説明を試みたいと思うが、つまり、テレビに映し出されて来るある「映像」を見て感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは、次に現われて来る「映像」を見て感じる思いなり考えなりあるいは感情なりによって薄められ、また、次に現われて来る「映像」を見て感じる思いなり考えなりあるいは感情なりによって、今までの思いなり考えなりあるいは感情なりは、さらに薄められ、また、次に現われて来る「映像」というように、次から次へと現われて来る「映像」によって薄められていくわけである。

それゆえ、その時、その時に感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)にしっかりと留まらないうちに、「映像の流れ」と一緒に多くは流れてしまっているからである。それゆえ、一時間番組を見終わった後、自分は、何を見たのか、ほんの一部しか思い出せないというような場合も、多いということである。

ふつう、われわれは、一画面、一画面の映像をしっかりと正確に、また、厳密に理解し

てから前に進んでいくのではなく、むしろ「映像の流れ」に身をまかせるといふような形になっているのだろう。そして、あるテレビ番組を見終わった後、鮮やかに甦って来るのは、多くの場合、その人にとってより強く印象に残った場面だけになるのだろう。——例えば、あのシーンは、実に感動的だったとか、あのシーンは、実に見応えがあったとか、あのシーンは、実に印象的だったとか、あのシーンでは涙が出て止まらなかったとか、あのシーンは、実に恐ろしかったとか、あのシーンは、実によかったとか、あるいは単に面白かったとか、楽しかったとか、意外につまらなかったとか、期待はずれであったとか、非常に神秘的だったとか、あるいは非常に画面がきれいだったとか、あるいは、あの女優さんは、非常に魅力的だったとか、彼女の目が特に印象的だったとか、あるいはあの男優さんの演技は、実によかったとか、魅力的だったとか、スタイルや顔立ちがよかったとか、さらにもっと細かく見ていけば、顔にしわがあるとかないとか、ほくろやしみ、その他などがあるとかないとか、髪が長いとか短いとか、色が白いとか黒いとか、衣装がどうか、足が長いとか短いとか、太っているとかやせているとか、その他、そういうふうにも、どうしても「感覚的」かつ「表面的」にとらえていることも多いのだろう。

つまり、「映像」というのは、特に「目」の感覚に強く訴えることが非常に多く、それゆえ、どうしても見た目のよいもの、カッコいいもの、表面的にきれいなもののほうが、一般的にはより受け入れやすくなるということである。もちろん、「耳」の感覚に強く訴える場合もあるだろうし、また、「心や精神」などに強く訴えるものも数多くあるだろうが、一般的に言って、「映像」というのは、本質的に「目や耳」などの感覚器官に強く訴えるものである。そして、「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れて行きやすいものである。もちろん、意識的に、一画面、一画面を、あるいは「流れる映像」をしっかりと見極めている人たちもいるだろうが、しかし、一般的に言って、われわれは、まさに「受け身」的な存在であり、どうしても「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れてしまう傾向があり、一画面、一画面を正確にしっかりと見極めてから前に進むというよりは、やはり「映像の流れ」と一緒に流れて行きやすいものである。

二、読書

一方、「読書」というのは、一字一句の意味をそれなりにしっかりと理解しながら、あるいは、それなりに書物に書かれている内容を消化しながら、前に進むのがふつうであり、それは、非常に「意識的」なものである。あるいは非常に「積極的」なものであり、また、精神を集中させて書かれている内容の意味をしっかりと理解しようと努めているものである。それゆえ、「頭の中」(或いは「心の中」)には「ある確かな手応え」を持って入って来るのでふつうではないかと思う。ところが、「映像」というのは、どうしても次から次へと流れて来るものであり、一画面、一画面をしっかりと正確に、また、厳密に理解してから前に進むというよりは、むしろ「映像の流れ」と一緒に自分の考えなり自分の思いなりあるいは自分の感情なりも一緒に流れて行きやすいものである。

例えば、ある「映像の流れ」を見て、その時、感じたことや思ったことを、そこで立ち止まって、じっくりと腰を据えて考えるとというわけにもいかないだろう。また、内容がよ

く分からないからと言って、そこで立ち止まるわけにもいかず、もし、立ち止まってしまえば、次から次へと現われて来る「映像」への注意が散漫になり、その後の「映像」を見ながしてしまふことが多くなり、その結果、その後の「映像の流れ」がどういう内容のものであったか、よく分からなくなってしまうからである。それゆえ、どうしても「映像の流れ」に身をまかせるような形にならざるを得ないものである。

もちろん、今日では、DVDやハードディスクなどに録画ができ得るので、何度でも同じ「映像」を納得がいくまで見ることができ得るかと思うが、しかし、それ以外の一般にテレビを見ている場合には、やはり「映像の流れ」に身をまかせるような形にならざるを得ないものである。——一方、読書の場合には、もし、意味がよく分からなくなれば、少し前からまた読み直して、その書かれている内容をしっかりと理解しながら、前に進んでいくことができ得るわけである。つまり、自分の速度で何度でもじっくりと時間をかけて読み直すことができ得るが、「映像」の場合には、どうしても、その「映像の流れ」に身をまかせるような形にならざるを得ないものである。

三、選択

もちろん、テレビの場合でも、積極的に、また、意識的に映し出されて来る「映像」の一面、二面をしっかりと見極めながら、前に進んでいる人たちも、それなりにいることにはなるのだろうが、しかし、一般的に言つて、例えば、テレビの場合、ニュースとか、ドラマとか、ワイド番組とか、幼児向け番組とか、音楽番組とか、自然や動植物などを扱った番組とか、料理番組とか、アニメ番組とか、クイズ番組とか、趣味や教養的な番組とか、バラエティー番組とか、あるいはスポーツ番組とか、特別報道番組とか、その他、もう実にいろいろな番組が各局で放送されているかと思う。しかも、われわれは、ふつうこれらの番組をある時間ずつと見続けていることになるわけである。

例えば、コマーシャルやニュースあるいはワイド番組などは、比較的短い時間に実にいろいろな内容のものが、次から次へと現われて来るものである。特にコマーシャルの場合を例にとつて話をしてみたいと思うが、コマーシャルというのは、極めて短い時間（十五秒か三十秒）の間に、それぞれお互い関連のない内容のものが、次から次へと現われて来るものである。試しに、その一面、一面を積極的に、また、意識的にしっかりと見極めようとして見入っていると、やがて、気持ちが変わりながら来るのを感じるだろう。なぜ、気持ちが変わりながら来るかと言えば、それは、あまりにも短い時間の間にそれぞれ関連のない内容のものが、次から次へと現われて来るからであり、われわれの「心や精神」は、それに十分に対応しきれなくなるからである。つまり、それぞれお互い関連のない内容のものを次から次へと意識的に、また、積極的にしっかりと見極めようとして見入るといふことは、われわれ人間の「心や精神」としては、とても耐えられないことだからである。それを無理に行なえば、かえって、人間の健全な「精神や感情あるいは感覚」などを傷つけてしまう危険性すら生じて来るものである。

例えば、テレビを二時間なら二時間、三時間なら三時間、ずっと続けて見ているということは、実にいろいろな内容のものをずっと見続けていることになるかと思う。例えば、ニュースをはじめ、スポーツとか、アニメとか、バラエティー番組とか、恋愛ドラマとか、

ホームドラマとか、サスペンスものとか、また、医療ものとか、歴史ものとか、時代劇とか、クイズものとか、趣味や教育的なものとか、自然や動植物を扱ったものとか、歌や音楽的なものとか、ワイド番組とか、特別報道番組とか、その他、また、それぞれの番組の合間合間には、様々な「CM」（コマーシャル）などが民放では数多く入ることになる。

そして、その一つ一つの「番組の内容」をもっと細かく見ていけば、悲しいもの、怖いもの、恐ろしいもの、驚くようなもの、おもしろいもの、楽しいもの、まじめなもの、また、悲しい場面、やりきれない場面、つらい場面、うっとりするような場面、笑いこぼれるような場面、いやな場面、あきれるような場面、イライラするような場面、見入るような場面、心惹かれるような場面、唾然とするような場面、感動するような場面、涙が出て止まらないような場面、その他、そういう実にいるような場面が、次から次へともうめまぐるしくごっちゃになって流れて来るものである。それら一つ一つを積極的に、また、意識的にしっかりと厳密に見極めようとしてテレビに見入るということは、かえって、われわれ人間の健全な「精神や感情あるいは感覚」などを傷つけたり、あるいは破壊してしまう危険性すら生じて来るものである。

それゆえ、われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、いわゆる「選択」を行なっているのである。そして、好きな場面、見たい場面、あるいは興味のある場面に對しては、より積極的に、また、より意識的に見ているわけだが、それ以外のあまり興味を引かない場面に對しては、多くの場合、軽く見流している、軽く聞き流していることになるのだろう。——例えば、一時間番組なら一時間番組を、最初から最後までずっと意識的に、また、積極的に見入るのではなく、むしろ、われわれは、自分の見たい場面、興味のある場面、あるいは心惹かれるような場面に對しては、より意識的に、また、より積極的に見たり、聞いたりしているわけだが、それ以外の場合に對しては、むしろ、あまり積極的でもなく、意識的でもなく、何となく軽く見流している、あるいは軽く聞き流しているというのが、ふつう一般的になるかと思う。

つまり、われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、その人なりに「選択」を行なっているのであり、好きな場面、興味のある場面、あるいは心惹かれるような場面に對しては、より積極的に、また、より意識的に見たり、聞いたたりしているわけだが、それ以外のあまり興味のない心惹かれないものには、むしろ軽く見流している、軽く聞き流しているということがある。われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、その人なりに「選択」を行なっているのである。それは、何もテレビや映画などに限ったことではなく、この世にあるありとあらゆる対象に對しても、われわれは、ふつう誰もがその人なりにその人なりの「選択」を行なっているものであり、好きなもの、興味のあるもの、あるいは心惹かれるようなものには、より積極的に、また、より意識的に、「見たり、聞いたり、嗅いだり、味わったり、感じたり」しているわけだが、それ以外の対象に對しては、むしろ、その対象を軽く見流している、軽く聞き流している、あるいはほとんど無意識の状態になっている、もちろん、時には嫌悪感や拒絶反応などを示している場合もあるのだろう。それゆえ、われわれは、自分の好きなもの、興味のあるもの、あるいは心惹かれるようなものからこそ、好んでいろいろなことを学び取っているということでもあるのである。

四、長所

話を元に戻して、ここで、「テレビ」の持つ機能の長所や利点について、少し話をしてみたいと思う。まず第一に、「映像」の特徴は、何かと言えば、それは、もちろん、テレビのカメラの「眼」によってとらえられた対象は、そのまま「映像」となって、われわれ見る側に、その対象をそのままそっくり見せてくれるというところである。例えば、ニュース番組などで、何か事件や事故が発生した現場から生中継を行なえば、その事件や事故が起こった現場の生々しい様子を、カメラの眼を通して見せてくれるものである。それは、事件現場や事故現場、爆発事故や火事現場、また、台風や地震、山火事や火山爆発などの様子や被害状況、或いは、様々な年中行事やお祭りそれに町の様子や人々の表情、その他、何であれ、生中継を行なえば、そのままそっくりその状況を見せてくれるものである。

つまり、「テレビ」の持つ最大の「機能」（長所）は、何かと問えば、それは、まさに「生中継」が出来るということである。それは、国内であろうと国外であろうと、まったく関係なく、今、現に起こっていることを同時に、しかもそのままそっくり見せてくれることであり、これは、何と言っても、最大特徴の一つなのである。——例えば、録画や編集されたものであれば、何もテレビでなくても、映画やDVDあるいはハードディスク（録画用）、その他などでも可能であるが、今、現に起こっているものをそのままそっくり見せてくれるのは、テレビやその他の「生中継」だけであり、それは、今、現在と同時進行をしているものである。——つまり、今そのものを、現在そのものをそのままそっくり映し出しているものであり、映画やDVDあるいはハードディスク（録画用）、その他などのように時間的にはすでに過去になっているものではなく、今、この時、この瞬間を、まさに鮮やかに映し出しているわけであるから、それが何と言っても、「テレビ」の持つ機能の最大長所の一つと呼んでもよいものである。

例えば、スポーツの「生中継」などは、テレビの機能が最も端的に発揮されるものの一つかも知れない。とにかく、それが国内であろうと国外で行なわれているものであれ、そのスポーツの試合の模様を同時に、しかもそのままそっくり家で寝転びながらも見ることができるわけであるから、これは、何と言っても、素晴らしいことではないだろうか。しかも、選手の顔の表情やもう一度見たい場面なども、リプレーやスローなどで、もう一度、見せてくれるわけであるから、これは、やはり素晴らしいことだと思う。ただ難点を敢えて一つ上げれば、それは、やはり試合会場のいわゆる「生の雰囲気や迫力あるいは緊迫感」などが、いま一つ直に伝わってこないという難点があるかと思う。しかし、それ以外には特になく、とにかく、今、現に行なわれている試合の模様をそのままそっくりしかも間近に、また、鮮明な映像で見せてくれるわけであるから、これは、何と言っても、「テレビ」の機能が最も端的に発揮されているものなのである。つまり、「テレビ」の機能の最大長所の一つは、まさに「生中継」を行なうことが出来るということであり、それは、今そのものを、現在そのものを（もちろん、カメラの「眼」を通してであるが）、そのままそっくり映し出しているということである。

それ以外にも、「テレビ」の機能の特徴は、まだ数多くあるわけである。それは、いわゆる「百聞は一見に如かず」ということになるかと思う。例えば、国内は、言うまでもなく、まだ行ったこともない各国それぞれの風景や街並みあるいは人々の表情や生活ぶりな

どをそのままそっくり見せてくれるし、また、自然の風景や動植物の生態なども、じつくりと鮮明な「映像」で見せてくれるものである。また、ふつうでは見ることでできない宇宙の様子や海底の様子、また、胎内の様子や微生物の様子なども、鮮やかな「映像」で見せてくれるものである。その他、それが、たとえどのような内容の番組であっても、テレビのカメラの「眼」によってとらえられたものは、もちろん、生中継以外は、様々な編集過程を経るにしても、その対象を一応そのままそっくり映し出してくれるものである。そのように、テレビの持つ長所の一つには、いわゆる「百聞は一見に如かず」というところがあり、それが、「映像」の最大長所の一つにもなるということである。

五、テレビの推移

テレビは、最初の頃は、白黒だったものが、今では、鮮明なカラー映像に変わり、音声多重や録画装置などもでき、また、衛星放送をはじめ、「デジタル化」やチャンネルが数多くある「マルチチャンネル化」も進み、さらに、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、カメラ、その他などの様々な端末とも結びついては、世界中の実に多種多様な「情報や娯楽」などが、家庭に居ながらにして見られる「マルチメディア化」も一層進むことになるのだろう。つまり、テレビは、現時点の機能のまま留まるのではなく、今後、ますます様々な端末などとも結びついて、その機能をさらに高めようとしているものである。それゆえ、テレビの持つ役割や有益性は、今後、ますます大きくなっていく可能性が、より高いということである。それでは、なぜ、テレビは、とかく「悪者扱い」されやすいのだろうか。これほどまでに多くの利点がありながら、どうしてなのだろうか？

まず第一に、考えられることは、まだテレビのなかった頃の家庭生活というものを思い出してみると、家庭の中心は、両親や祖父母であり、子供たちは、その両親や祖父母たちからいろいろな話を聞きながら育ったわけである。つまり、そこには家族間の直接的な会話が数多くあったということである。ところが、テレビが家庭の中心にどっかと重い腰を下ろして居座るようになってから、家庭の中心は、テレビに取って代わられ、しかも、子供たちは、親や祖父母たちの言うことよりも、むしろテレビの言うことを信じるようになってしまったということである。そして、家のなかでは、兄弟と遊んだり、また、両親や祖父母とあれこれ話をしたりという、いわば人間との直接的な関わりが中心であったものから、今やテレビを中心として、そのテレビを見ながらということになれば、どうしても人間との直接的な関わりが少なくなってしまう。つまり、外では友達たちと思いつき遊び合い、そして、家では家族と色々な話をしたりする機会が、だんだんと少なくなっているということである。そして、テレビをじっと見入っている間は、からだを動かすこともないので、その間は、とかくわれわれから活動を奪ってしまうものである。つまり、テレビが茶の間にとっかと重い腰を下ろして居座るようになってから、いわゆる家族間では、とかく面と向かつての直接的な会話が少なくなり、多くは、テレビを見ながらの会話となりやすいたともに、子供たちは、一般に、親の言うことよりも、むしろテレビの言うことを信じるような傾向を生み出してしまったということである。また、外では、近所の子供たちと思いつき遊び合う機会も奪われやすくなり、人間との直接的な関わりが少なくなっている傾向があるということである。もちろん、それは、習い事や学習塾通いなど

が、子供たちから様々な「遊び」を奪っているということでもあるのだろう。

ただ、ここで特に言いたいことは、ほかでもなく、それは、人間との直接的な関わりが少なくなるということ、子供たちの「社会性」が健全に育つ機会がとかく奪われやすいということである。つまり、「親」中心から「テレビ」中心の家庭生活に移行することによって、親子間での直接的な会話や関わり方が、希薄で表面的なものになりやすく、また、友だちとの関係も、通り一遍の表面的なつき合いになって、親密で直接的な関わりが希薄になりやすいということである。なぜなら、人間との直接的な関わりを持ってこそ、そこに「親密さや信頼感」なども生じて来るものであるが、いわゆる「テレビ」を通じての間接的な「関わり」というのは、極めて気楽なものになるからである。

つまり、相手のことをあれこれ思えばかることが、まったく必要ではないからである。しかし、人間と直接関わるということは、そこには実に様々なあつれきや揉め事あるいはいやなことや煩わしいことなどが生じて来るものである。もちろん、楽しいことやうれしいことなども多々あるだろうが、また、様々な事態にも対処しなければならぬものである。それは、かなり大変なことであるが、そういう人間との直接的な関わりを通じて、様々な事態に直面した時の臨機応変の対応の仕方を、自然と学ぶことにもなるわけである。つまり、子供たちは、友だちとの様々な「遊び」などを通じて、人間との直接的な関わり方や様々な事態に直面した時に、どのように対応したらよいのかを直接的に「体験・経験」し、身を以って学ぶことになるということである。

一方、「テレビ」や「ゲーム」と関わっているだけでは、そういう人間との直接的な関わり方は、身に付かないものである。なぜなら、「テレビ」や「ゲーム」との関わり方は、相手のことを特に思いやる必要がまったくなく、こちらから思いを寄せるだけで、まさに一方通行になりやすいからであるが、人間との直接的な関わり方では、相手は、いつも自分の思い通りに言ったり、やったりしてくれるものではないのである。友だちとの直接的な様々な「遊び」などを通じてこそ、人間との直接的な関わり方や様々な事態に直面した時の対応の仕方などを理屈ではなく、まさに身を以って「体験・経験」し、直接的に学ぶことになるのである。そして、子供の時こそは、そういう人間との直接的な関わりを十分に持たないと、人間としての十分な「社会性」がとかく欠落しやすいのである。

つまり、子供たちの「社会性」が健全に育っていく機会が、とかく奪われやすいということである。それゆえ、子供の頃には、人間との直接的な関わりはもとより、いろいろな動植物、自然、その他との直接的な関わりもできるだけ多く持たせることが、極めて大事なことになるのである。なぜなら、子供の頃のそういう様々な直接的な「体験・経験」こそは、まさに「原体験」となり、その人のその後のいわゆる「人間性」を形づくっていく大きな「要素」（要因）となっていくものだからである。それゆえ、人間性豊かで、創造性にも富んだ人間を真に育てたいと思うならば、もっと自然のなかで思いっきり友だちと遊ばせるべきであり、その「自然の中」にこそ、いわゆる物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などが深く眠っている、まさに「宝庫」なのである。もちろん、学校の勉強や習い事なども大事なことはあるが、それとともに、多くの子供たちと様々な「遊び」で思いっきり遊び合うということも、それに勝るとも劣らず大事なことになるわけである。なぜなら、様々な「人間や動植物、自然、その他」などとの直接的な関わりこそは、その人が「ものを考える」上での最も信頼できる根底的な「掘り所」であり、また、様々な「体

験・経験」を踏まえての、まさに「生きた知識」ともなり得るものだからである。

六、テレビの影響

ところで、われわれは、「テレビ」を見始めると、どうしてもだらだらと見続けてしまうものであり、また、毎日のようにテレビを通して実に様々なものを見聞きしているのもうどういものものに対して、慣れっこになってしまい、いわゆる「新鮮な驚き」や「素朴な感動」というものは、とかく得られにくくなっていくのではないかと思う。また、変化に富んだものでないと、すぐに飽きてしまい、とかく刺激的なものを求めやすいものである。そして、事件から事件へと飛び移っていく、話題から話題へと飛び移っていく。つまり、表面的な現象を次から次へと追うようになりやすい。そして、一つのことを深く厳密に考えることが、もう面倒臭くなって来る。また、あまりにも手軽にいろいろなもの「テレビ」は、われわれに見せてくれるために、他人のやっていることを見聞きしているだけでもう十分になってしまう。あるいは自分が実際にそういう経験をしようとしたような錯覚に陥ってしまうこともあり、また、いろいろ刺激的な内容や話題などによって、われわれの心は、意味なく振りまわされたり、とかく自分を見失いやすいわけである。そして、地道に努力を積み重ねていくことが、何か馬鹿馬鹿しくなって来て、遠くのを努力を積み重ねて追い求めるといよりは、もっと手っ取り早い方法で、先のことなどはあまり考えずに、とにかく、「目先の欲や目先の快楽」などを貪欲にむさぼりたいという安直で現実的な「精神状態」にもなりやすいということである。もちろん、必ず、そうなるということではなく、一般的に、そういう傾向があるということである。

それでは、いっそのことテレビなどは見ない方がよいのだろうか。考えてみれば、長い人類の歴史のなかで、テレビが出現して、われわれ人間に何らかの影響を与え始めたのは、ごく最近のことであり、それまではテレビなどなくても、むしろ、何の不自由もなく生活できたわけである。また、様々な知識や情報などは、主に「活字」文化を通じて得てきたわけである。ところが、終戦後、民主主義とともに、テレビを含めた実に様々な電化製品が、急速に一般家庭へと普及し、今日では、テレビや様々な電化製品のない生活などほとんど考えられないほど、われわれの生活のなかに深く溶け込んでいるわけであるが、今後、ますます様々なニューメディア類が、家庭の中に入ってくることになるのだろうか。

そして、今までは、主に「活字」文化を中心としたものから、今後は、「映画、テレビ、アニメ、マンガ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、動画(写真)、その他」などを使った伝達手段が、より多くなるということである。それらをひっくるめて、いわゆる「映像化時代」と呼びたいわけであるが、今までは、主に「活字」によって「情報伝達」を行なっていたものから、今後は、まさに「映像や写真或いは漫画やアニメ」その他などを使っている「情報伝達」がより多くなるということである。

むしろ、だからと言って、「活字」による「情報伝達」が全くなくなってしまうわけではなく、むしろ、今までは七割から八割近くまでが「活字」に頼っていたものから、今後は、「活字」と「映像や写真或いは漫画やアニメ」などの割り合いが、五分五分になる、あるいはそれに近い割合になるということである。それは、むしろ歓迎すべき状態なのかも知れない。どちらか一方に極端に傾くことは、かえって、必要かつ十分な「情報伝達」

ができてくいのかも知れない。つまり、「活字」文化と「映像」文化とをより高いところで深く調和させることができれば、今まで以上に必要かつ十分な「情報伝達」や「意思伝達」が可能になるのかも知れない。また、そういう方向に向けて努力をしていくべきなのだろう。

確かに、テレビには様々な弊害もあるが、また、いろいろな長所や利点などもあるのである。そして、テレビほど「今、現在」を最も如実に映し出し、また、「今、現在」の人々の言動を如実に映し出しているものはないのであり、テレビ番組の「質や内容」が落ちたと嘆くよりも、そういうものを好んで見聞きしているわれわれ見る側の「意識」や「精神状態」を、もう一度、見直した方がよいのかも知れない。というのも、われわれ人間は、結局、自分に見合ったもの、あるいは自分の好みや趣味にあったものを好んで見聞きしているものだからである。ただ問題があるとすれば、それは、やはり、テレビと子供との問題になって来るのだろう。子供というのは、どうしてもテレビから流れて来る「映像」をそのままそっくり見聞きし、そして、とかく「影響を受けやすい、また、真似しやすい」という傾向があるということである。つまり、子供たちは、真似ることから様々なことを学んでいくことが多いからである。そして、テレビで見聞きしたものが、その人の「心の中」に蓄えられるわけであるが、それが、その人の人生にどのような影響を与えていくかは、なかなか厳密には分かりにくいものである。ただ一般的に、子供というのは、とかく「影響を受けやすい、また、真似しやすい」という傾向があることは、間違いないことであり、そのことは、一応考慮に入れておいてもよいことである。

七、記憶の推移

確かに、われわれは、毎日、様々な「テレビ番組」を見聞きしているので、誰もがそのテレビから何らかの「影響」を受けていることは間違いないだろう。しかし、一方、毎日、見聞きしている様々な「テレビ番組」の詳しい内容などは、ほとんど忘れていくという現実があり、そして、何日か立てば、もうほとんど想い出すこともできないものも極めて多いとともに、たとえ想い出すことができ得ても、その多くは、大まかどこか曖昧で漠然としたものであり、細かなところまではなかなか正確に想い出すことは難しく、それゆえ、特に強く印象に残った部分だけになってしまいうことも多いのだろう。それは、やはり「テレビ」という媒体を通じて間接的に見聞きした、まさに「間接的な知覚」であり、自分が実際に「体験・経験」した「直接的な知覚」とは全く違って、いわゆる直接の「手応え」というものがないからではないかと思う。

それと同時に、「テレビ」という媒体が生来そういうものなのである。つまり、次から次へと様々な「映像」が休みなく流れて来るのであり、われわれは、その「映像の流れ」に身をまかせ、一緒に流れていくしかないからである。そのことは最初のところでも触れたように、テレビに映し出されて来るある「映像」を見て感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは、次に現われて来る「映像」を見て感じる思いなり考えなりあるいは感情なりによって薄められ、また、次に現われて来る「映像」というように、次から次へと現われて来る「映像」によって、その時に感じた思いなり考えなりあるいは感情なりは薄められ、まだ「心の中」にしっかりと留まらないうちに流れてしまう傾向が強いわけである。

それでは、どうしたらよいのか？ それは、やはりだらだらと長く見続けられないことも知れない。何時間も雑多なものを見続けてしまうと、どうしても様々な印象が入り交じって、一つ一つの印象が薄れてしまうからである。それゆえ、ある程度、決めて見るといことが大事になって来るのかも知れない。そして、「心の中」にしっかりと「記憶」しておくためには、やはり、何となく見聞きするのではなく、かなり意識的に、また、積極的に見聞きすれば、それだけ「記憶」に留めることができやすくなるということである。

もちろん、テレビは、「娯楽」としてもっと気楽に楽しめば、それでよいものである。ただ、「心の中」にしっかりと「記憶」に留めたいと願うならば、やはりかなり積極的に、また、意識的に見聞きすることが大事になって来るのだろう。何となくだらだらと見ているだけでは、どうしても次から次へと流れて来る「映像の流れ」と一緒に自分の考えも思いも感情も流れやすく、「心の中」にしっかりと留めることは、難しいことになるのだろう。それに加えて、見たものを何度か思い出しては、それらを「心の中」で「反芻」してみることも大事なことであり、この「反芻」の積み重ねこそは、はつきりとした「記憶」として「心の中」にしっかりと留めさせるものであると共に、過去の様々な「体験・経験」を、いわゆる「思い出」として再構築させている「心の働き」でもあるわけである。

例えば、「クイズ番組」などであれば、様々な「知識」を得たり、学んだりすることができ得るじゃないかと思いがちであるが、確かに、一面ではそういうところがあるのかも知れない。しかし、「クイズ番組」などによって得た「知識」などというのは、いわば断片的な「知識」であり、何日か立てば、ほとんど忘れ果ててしまうものばかりである。それは、まさに「切り花」のごとく「根っ子」がないために、やがて枯れてしまうものである。大地にしっかりと根を張って、そこから養分を吸い上げ、自らの「花」を咲かせるようなものとは、本質的に違うものなのである。

試しに、「クイズ番組」を見終わったあと、どういう内容の「クイズ」があったかを思い出してみれば、すぐに分かることであるが、そのほとんどをすでに忘れてしまつて、あいまいにしか思い出すことはできないものである。それは、なぜか？ それは、あまりにも「断片的な知識」であり、また、幾つも続けて出題され、しかもお互いの間には何のつながりもなく、また、たとえつながりがあつたとしても、その問題は、自分がぜひとも知りたいことであるとは限らず、自分がほんとうに知りたいことを何かで調べたりして、自ら学んだものであれば、記憶に残りやすいものであるが、「テレビ」というのは、一方的に様々な内容をただ提供してくれるだけだからである。そして、「クイズ番組」で得た「知識」というのは、あまりにも断片的であり、それは、ちょうど巨大なジグソーパズルの一片のようなものであり、その知識だけでは、何の役にも立たないのと同時に、やがて忘れ果ててしまうことが非常に多いわけである。

例えば、「ニュース番組」も実にいろいろな内容のものが、次から次へと放送されて来るものであるが、その「ニュース番組」を見終わったあと、正確に思い出せるものが幾つあるか、試しにやってみると非常によく分かるのであるが、かなり真剣にまた意識的に見れば、ある程度は思い出すことができるだろう。しかし、それほど意識的ではなく、ふだんテレビを見るような軽い気持ちでニュース番組を見たあと、さて、今日はどんなニュースがあつたかを思い出す段になつた時に、いかに覚えていないかに愕然とすることはよいことなのである。また、思い出せたものがどのくらい正確に思い出せたかを試してみ、

正確にまた厳密に想い出せるものが極めて少ないことに、二度愕然とすることは、さらによいことなのである。つまり、想い出せたものの多くは、大ざっぱに覚えておられるか、あるいはかなり曖昧に覚えていることが多いのだろう。それは、何も「クイズ番組」や「ニュース番組」に限ったことではなく、それは、「テレビ番組」すべてについて言えることである。——それに加えて、二時間なら二時間、三時間なら三時間、テレビを見続けるとしたら、それこそ極めて様々なものが、次から次へと現われて来るものである。しかも、われわれは、それらの「映像」をそれほど不自然さを感じずに見ているかと思うが、しかし、よく見てみると、「映像の流れ」というのは、様々な内容のものが人工的に結びついた実に「不自然な流れ」であり、それは、「水の流れ」のような自然な流れとは、まったく全然違うものなのである。

八、映像の流れとは

例えば、「映画」もテレビの「ドラマ」も基本的には全く同じことだと思うが、あるカットとあるカットを幾つもつなぎ合わせたものであり、それが一時間なら一時間の「映像の流れ」になるわけである。だから、画面をよく見ていると、「映像の流れ」というのは、非常に不自然な流れであり、それは、途切れのない「川の流れ」のような自然な流れとは全く違って、あるカットとあるカットとを無数につなぎ合わせた人工的で不自然な流れなのである。むしろ、ドラマの流れは、コマースシャルの流れのように、それぞれお互い関連のないものが次から次へと流れて来る流れではなく、あるカットとあるカットとはお互い深い関連を持つ内容のものが流れて来るが、それでも画面をよく見ていると、ある画面からある画面へと、パツ、パツと画面が切れて新しいカット（画面）に入るのがよく見られるかと思う。それは、何も「ドラマ」だけに限ったことではなく、テレビ番組のすべての「映像の流れ」について言えることである。そして、そういうことに気づいてテレビの「映像」を見てみると、「映像の流れ」とは極めて人工的かつ不自然な流れであることにはつきりと気づくことになるわけである。ちなみに、画面がパツ、パツと切り替わるのを意識してしばらく見ていると、やがて何がなんだかその内容がよく理解できなくなってしまうほど、いわゆる「映像の流れ」というのは、あきれるばかりの「不自然な流れ」であることがはつきりと実感できるかと思う。

それでは、なぜ、われわれは、その「不自然さ」をほとんど感じないで見ていられるのだろうか？ それは、まず、「カット」と「カット」とのすき間を埋めているのは、われわれ見る側の「精神」であり、その「精神」によって、ごく自然に結びつけられて、見ている人は、そこに不自然さをあまり感じないで済んでいるわけである。しかし、そこには間違いなく「切れ間」があるのである。そして、その「切れ間」をわれわれ見る側の「精神」がほとんど無意識のうちにつなぎ合わせているわけだから、長い時間、テレビを見れば、その人の「精神」も「肉眼」も疲れて来るのは、むしろ当然なことなのである。

つまり、テレビの「映像」とは、まさに「つなぎ合わせた映像の流れ」であり、それを自然の流れとして見ることができるのは、われわれ見る側の「精神」（つまり「構力」や「想像力」）によるものなのである。例えば、生放送の場合にも、カメラをパツ、パツと切り替えているので、自然な「映像の流れ」とはとても言えないものである。だから、

もし「つなぎ合わせの全くない映像の流れ」をつくろうとすれば、カメラをある場所にしっかりと固定をして、しかも、ある一定の方向から撮り続けることである。それを一時間なら一時間、撮り続ければ、切れ目のまったくない「映像の流れ」になるわけである。それは、「人工的な流れ」ではなく、極めて「自然の流れ」なので、見ている人の心もその「自然の流れ」によつて、心が落ち着き、開放され、なごむ効果を持っているものである。それは、なぜかと言えば、それは、まさに「自然の流れ」だからである。それは、ちょうどわれわれが川の「自然な流れ」を見ていると、次第に心が落ち着き、開放され、心がなごむのとまったく同じことであり、それは、まさに「自然の流れ」だからである。

一方、「映像の流れ」というのは、まさに人工的で不自然な流れであり、そういう人工的で不自然な流れに長く耐えられるはずもないわけだが、われわれは、平気で何時間でもテレビを見ていられるのは、一体、なぜなのか？ それは、実に簡単なことであり、われわれは、意識的にしろ、あるいは知らず識らずのうちにしろ、いわゆる「選択」を行なっているのである。つまり、好きな場面、見たい場面、あるいは興味のあるような場面に對しては、より積極的に、また、より意識的に見ているわけであるが、それ以外のあまり興味を引かれないような場面に對しては、多くの場合、軽く見流している、軽く聞き流していると言つてもよいのだろう。だからこそ、長い時間、平気で見ていられるのである。テレビから流れて来るすべての映像を、すべて意識的に、また、積極的に聞き取ることなどできるわけもないので、そんなことを無理に行なえば、かえつて、健全な精神を破壊してしまう危険性すら孕^{はら}んでいるものである。それほどまでにあまりにも多種多様なものが、次から次へと休みなく流れて来るのが、まさにテレビの「映像の流れ」なのである。

話を元に戻しますが、「ニュース番組」を見たあと、思い出せたものをよく検討してみれば、それは、その人が何らかの興味や関心を持つて意識的に、また、積極的に見たものであることが多く、軽く見流したり、軽く聞き流してしまつたもの、あるいは無意識的な状態で見聞きしたものは、ほとんど忘れてしまうものである。おぼろに思い出すことがあつても、やがて、日が経てば、ほとんど忘れてしまうものである。そして、「心の中」に記憶として残るのは、多くの場合、やはり、その人が何らかの興味や関心を持つて積極的に、また、意識的に見聞きしたものに限られて来るのだろう。また、逆に言えば、積極的に、また、意識的に見聞きしたものは、「心の中」に記憶として残りやすく、それほど意識的でもなく、積極的でもなく、何となく軽く見流したもの、軽く聞き流したもの、あるいは無意識的な状態で見聞きしたものは、時間の経過につれて、ほとんど忘れ果ててしまふことになるのだろう。これは、考えてみれば、あたり前のことであり、何もテレビに限つたことではなく、どういうことでも積極的に、また、意識的に見聞きしたものは、「心の中」に記憶として残りやすく、一方、あまり意識しないで見聞きしたものは、あるいは無意識的な状態で見聞きしたものは、「心の中」に記憶として残りにくいということである。

つまり、自ら意識的に見聞きしたり、学んだりしたものは、「心の中」に記憶として残りやすいものであるが、テレビなどを見て得た「断片的な知識」などは、その多くの場合、日が経つにつれて、ほとんど忘れ果ててしまうことが非常に多いわけである。例えば、ニュースなども、毎日、様々な事件や話題などをわれわれに提供してくれるわけだが、その人が特に「興味や関心」を持ったもの以外は、ほとんど忘れ果ててしまうものである。何度も言うように、自ら積極的に、また、意識的に見聞きしたり、学んだりしたもののこそ、

「心の中」に記憶として残りやすいものであり、通り一遍に見たり、聞いたりしたことは、とかく忘れ果ててしまうことが、非常に多いということである。

九、潜在意識

だからと言って、それらがすべて無意味なことであるというのではない。通り一遍でも、見たり、聞いたりしたものは、大原則として、「心の中」に蓄積されるものである。つまり、「潜在意識」として「心の中」に残ることになるのである。

例えば、ふだんわれわれは、いわゆる「コマーシャル」というものを、それほど一生懸命に見たり、聞いたりしているわけではなく、多くの場合、何気なく見聞きしている、つまり、軽く見流したり、軽く聞き流しているわけだから、それが一度限りであるならば、やがては完全に忘れ果てて想い出すこともないだろう。ところが、「コマーシャル」というのは、何度も何度も同じような内容のものを流すわけである。そうすると、「コマーシャル」というものを、そんなに一生懸命見ていなくても、何度も見ているうちに、自然と「心の中」に蓄積されて、いわば「潜在意識」として残るようになるのである。

例えば、スーパーマーケットなどに買い物に行けば、そこにはいろいろな「食料品」が並べられている。そこで、例えば、「即席ラーメン^{インスタント}」を例にとつて話してみたいと思うが、店には様々な「ラーメン」が実に数多く並んでいるわけであるが、その中から何を選ぶかの段になった時に、むろん、その人にお気に入りのラーメンがあれば、そのラーメンを取りあえずは買うであろうが、その時に、例えば、テレビのコマーシャルなどで見たことがあるラーメンを発見すれば、「……あつ、このラーメン、そう言えば、テレビのコマーシャルで宣伝しているのを見たことがあるわ！」というような感じで、その時に、ふと想い出すわけである。このふと「想い出す」というところが、最も大事な急所（まさに「核心部分」）なのである。つまり、ふだんは「心の中」に「潜在意識」として深く眠っていたものが、その「ラーメン」と出会った瞬間、いわゆる「無意識の世界」から「意識の世界」へと呼び起こされて、まさに「意識」の上のぼつて来るわけである。ふだんは心の底に深く眠っていて、想い出すこともほとんどないわけだが、スーパーマーケット、その他などに行つて、その「ラーメン」を見た瞬間に、ふと想い出しては、「……あつ、このラーメン、そう言えば、テレビのコマーシャルで見たことあるわ！」というような感じで興味や関心を示し、そして、「……このラーメン、一体、どんな味がするのか、一度、食べてみようかしら？」というような感じで購買欲をそそられることにもなるわけである。つまり、まったく知らないものに対しては、われわれは、なかなか「興味や関心あるいは親しみ」などを感じるといふことはできにくく、ましてや買うとなれば、なおさらのことになるのである。

本来、「コマーシャル」の役割というのは、できるだけ多くの人に「その存在」を知ってもらふことと同時に、いわゆる「興味や関心あるいは親しみ」などを感じさせることでもあるわけだ。そして、何度も何度も同じ内容のものを流すことによつて、自然とわれわれの「心の中」に蓄積されて、いわば「潜在意識」として残るようになるわけである。むろん、ふだんは「心の中」に深く眠っていて、想い出すこともほとんどないわけだが、何らかのきっかけで、ふと想い出すことになるわけである。

例えば、「スマホやパソコン」などに興味や関心を持ちはじめ、そして、「スマホやパソコン」を買いたいなあと思った時に、今までは何気なく軽く見流していたスマホやパソコンの「コマーシャル」などを真剣に見るようになるだろう。そして、いろいろとある「スマホやパソコン」のなかから何を選ぶかの段になった時に、まったく知らないものよりは、何らかの「コマーシャル」やパンフレットあるいはパソコン雑誌などを見て知っている方が、「親しみ」を感じやすいし、また、買いやすいわけである。むろん、その人がどういうスマホやパソコンを欲しているのか、また、どのくらいの値段のものにしたいのか、そういうことを考慮に入れて買うわけであるが、その時でも、やはりまったく知らないものよりは、コマーシャルなどを見て知っている方に、「親しみ」を感じやすいし、また、買いやすいと言ってもよいのだろう。それが、「コマーシャル」というものが成り立つ大きな要因の一つである。何度もうり返すようであるが、まったく知名度のない「商品」を買うというのは、買う側から言えば、なかなかできにくいことであり、どうしてもテレビやその他のコマーシャルなどで、安心して買うことができるという心理にもなるわけである。また、そういうものの方が、安心して買うことができるという心理にもなるわけである。なぜ、各社が膨大な宣伝費を費やして、テレビやその他のところで大々的に宣伝を行なっているのかと言え、それは、やはり、まずできるだけ多くの人たちにその「商品」の存在を知ってもらいたいということと、もう一つは、知ってもらうことによって、それだけ「商品」に対して、自然と「興味や関心あるいは親しみ」なども持つてもらいたいということでもあるが、それに加えて、買いやすくなるからである。つまり、流れているコマーシャルが、もし人々の興味や関心を呼び起こすようなコマーシャルであればあるほど、それだけ見ている人たちは、より強い「興味や関心あるいは購買欲」などをそえられることになるとともに、それが全国的な規模での宣伝ともなれば、その数は、大変な数に上り、その結果、売り上げも一気に急上昇することにもなるわけである。

そして、宣伝には、よく「有名人」や「芸能人」などが数多く登場して来るが、それは、非常に簡単な理由からなのである。つまり、すでによく知られている有名人や芸能人であれば、それだけ多くの人々の興味や関心を集めやすいとともに、やはり親しみや信頼感などを与えることにもなるからである。また、その「商品」とその「人」とが自然と結びついて、例えば、「……誰々が宣伝している、あれだよ!」とか、「……ああ、誰々が宣伝しているあれか!」とか、また、「……誰々が宣伝しているあれなら、よく知っているよ!」というような感じで、「商品」と「その人」とが自然と結びついて、よりはっきりとした強い印象を与えやすく、それだけ宣伝効果もより高まることになるわけである。

それは、何も人間に限ったことではなく、人気の高い「動物」やその他の対象が、コマーシャルに使われることもあれば、また、「若い女性」が数多く登場するのも、一つには「新鮮な感じ」を与えるとともに、やはり多くの人たちの興味や関心を集めやすいからであろう。それは、もう何度もうり返しているように、その人にとってまったく知らない「商品」というのは、買う側から言えば、どうしても興味や関心が向きにくく、また、買いにくいものである。なぜなら、それが果たしてよい商品なのか、信頼できる商品なのか、どういうものなのかが、まったく分からないからであり、そういうものに対しては、どうしても警戒心や敬遠する気持ちが、より強くなるものだからである。

やはり、よく知っているもの、安心して買えるものを選びやすいわけである。むろん、

値段の安いものに越したことはないが、その時でさえ、値段の安いものなかでも、まったく知らないものよりは、少しでも知っている商品を選びやすいわけである。ここに「コマーシャル」というものの存在理由の一つがあるわけである。つまり、「商品」の存在を知ってもらおうだけでも、まったく知られていない状態よりは、遙かに有利な立場に立っているということである。それは、何も「商品」に限ったことではない。例えば、まったく知らない「店」にはなかなか入りにくいものであり、一度でも、あるいは行きつけの「店」の方にどうしても足が向きやすいという傾向は、多分にあるかと思うが、それは、やはり、それだけその「店」に親しみや気やすさあるいは信頼などを寄せているからであろう。もしいやな「店」だと思っていれば、なかなか行きにくくなるだろう。つまり、人間は、少しでも親しみや好感のもてるもの、また、興味や関心をそそられるもの、あるいは信頼できるようなものへと向かう性向が、はっきりとあるということである。

*

*

さて、「コマーシャル」の話が長くなったが、話をもとに戻して、いわゆる「潜在意識」についてももう少し話をしてみたいと思う。例えば、われわれは、毎日のように実に様々なものを「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ」ながら、実に様々な「体験・経験」をしているわけであるが、それらは、知らず識らずのうちに、「心の中」に蓄積されて、いわゆる「潜在意識」として「心の中」に残ることになるわけである。そして、ふだんは「心の中」に深く眠っていて、想い出すこともあまりないわけだが、ある日、ある時、何らかのきっかけから、ふと「あること」を想い出すことにもなるわけである。つまり、われわれは、この世に生を授かり、そして、今日まで生きてきた「全過去」(つまり「全体験・全経験・全学習・全想い出、その他」などを、誰もが自分の「心の中」に蓄^{たくわ}えているわけである。そして、ふだんは「潜在意識」として「心の底」(つまり「無意識の世界」)に深く眠っているわけであるが、何らかのきっかけから、ふとそれを「想い出す」ことにもなるわけである。——つまり、何らかのきっかけがあれば、何とか想い出すことのできるものと、もうどんなきっかけがあっても、まったく想い出すことのできないものとに大別されるかと思うが、そのどちらの場合であっても、その人の人生に有形無形の「影響」を与えていると言ってもよいのだろう。つまり、過去の「体験・経験」が、その人の人生に有形無形の「影響」を与えていることになるということである。

例えば、あの時、あの本を読んだことが、その後の自分の人生に大きな影響を与えているとか、あの時、いやな思いをしたことが、その後、今でもそれが好きになれない大きな理由であるとか、また、あの時、あの人に出逢ったことが、その後の自分の人生を大きく変えることになったとか、あるいは、あのことがあの出来事がまたあの出逢いが、その後の自分の人生にいろいろと大きな影響を与えているとか、その他、そういうふうに過去の様々な「体験・経験」というものが、その時だけではなく、その後のその人の人生にも大きな影響を与え続け、また、その人の「人間形成」にも、そして、その人の「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などにも少なからず「影響」を与えることにもなるのだろう。それは、例えば、「あの時、ああいう体験・経験したから、こうなのだ」と、自分でもはつきりと自覚できるものと、一方、そういうふうに「こうだから、こうなのだ」とはつきりと自覚できなくても、過去の様々な「体験・経験」が、その人に何らかの影響を少なからず与えていることも多いのだろう。そして、

過去の様々な「体験・経験」のどういうものが、どういうふうに作用して、その人をどのように動かしていくのかは、なかなか厳密には分かりにくいものである。

十、子供への影響

例えば、「……テレビは、子供たちについてどういう影響を与えているのか」ということが、よく議論されたりするものだが、この問題も簡単に片づく問題ではなく、なかなか難しい問題を孕^{はら}んでいるものである。——例えば、子供たちが好んで見る「テレビ番組」としては、やはり「アニメ」や「子供向け番組」などが多く、また、人気の高い「ヒーローもの」や笑いを中心とした「娯楽番組」、その他など、それは、その子供たちによっても、また、その時々によっても、見るものはみな違って来るだろうが、その多くは、子供向けや娯乐的なものを中心としたものになるのだろう。それは、もう一人ひとりの好みであり、その人が見たいものを見、見たくないものは見なければ、それでよいものであり、また、本来、テレビを見るとは、誰だってそうであるしかないだろう。それでは、なぜ、「テレビ番組」の内容は、とかく問題視されることが多いのだろうか？

例えば、暴力的なものや人殺しなどが多く出てくるもの、また、裸や濡れ場などの多いポルノチックなもの、あるいは残忍、残虐なもの、その他、そういうものは、子供たちにはあまりよい影響を与えないということ、とかく「批判や非難」の的^{まじ}になりやすいものであるが、それは、なぜかと言えば、それは、やはり「……子供たちは、影響を受けやすい、また、子供たちは、すぐに真似しやすい」ということである。確かに、子供たちは、すぐに真似をするという最大特徴を持っている。しかも、それは、大人の人たちが思っている以上に、遙かに様々なことで影響を受けやすく、また、真似しやすいものである。

例えば、乳幼児期などは、真似ることからほとんどのことを学び取っているし、また、子供の遊びのなかの「何々ごっこ」というのは、すべて真似の遊びである。また、CMや人気アイドルの真似をしたり、また、社会の出来事や話題になった人物の言動を真似したり、身近な友だちの真似をしてからかかったりと、子供たちは、その時々の流行語なども巧みに取り入れては、様々なものを真似て楽しんでいくわけである。また、人のやっていることをすぐに真似たがる傾向もあり、誰々がやっているから、自分もやってみようかしら、と、すぐに影響を受けて真似したがる傾向もあり、だからこそ、様々な流行やブームなどが、子供たちや若い人たちの間からこそ、多くは生まれやすいわけである。むしろ大人の人たちでも多くのものからいろいろな影響を受けてはいるが、しかし、子供たちが様々なものから受ける「影響」というのは、大人の人たちが受けるような「間接的^{インディレクト}なもの」ではなく、それは、もっと「ストレート」であり、かつ「もろで直接的なもの」なのである。もっと言えば、「そのままそっくり影響を受けてしまう」傾向があるということである。

そんな馬鹿なことはないだろう。幼児ならともかく、小学高学年や中・高校生ぐらいになれば、もう誰だって自分でものを考える力も判断する力も備わって来るだろう、と反論するかも知れない。むしろ、自分でものを考える力も判断する力もそれなりに備わって来るだろう。そして、確かに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動しているように一見見えるが、その多くは、意外と何らかの「真似」か、その「影響」であることが極めて多いわけである。それは、もう本人にもそうとは気づかないほど根深い根源的なものなのである。

というのも、自分の「考えや判断」などに対して確たる自信の持てない時期にあたるからである。子供たちの「心」は、意外と不安定で頼りなくゆれ動いていて、どうしても他人の「意見や考え」などから影響を受けやすく、また、大きく左右されがちなのである。ほんのちよつとした相手の言動にも、「心」が激しくゆり動かされやすい時期なのである。

もちろん、自分でものを考える力も判断する力も持ち合わせているので、自ら考え、自ら判断し、自ら行動したいと思っているわけだが、一方では、自分の「考えや判断」その他などに対して、もう一つ、「確たる自信」が持てないという、そういう「精神的ジレンマの時期」にあたるわけである。それが、若い時の、変わりようのない「心の状態」であり、若い人の誰もが、多かれ少なかれ、そういう「心の状態」に置かれているということである。また、この若い時期は、いわゆる「好き嫌い」の激しい時期でもあり、好きなのは、積極的に好んで受け入れるが、一方、嫌いなものに対しては、強く時には徹底的に反発する時期でもあるわけである。その他、若い時の特徴は、いくらもあるだろうが、そういう若い人たちが、いわゆる「テレビ番組」からどういう影響を受けるかは、難しい問題であり、また、何らかの影響を受けたからと言って、それが即「行動」になる場合もあれば、そうならない場合もあるのだろう。また、テレビで見たり、聞いたりしたものは、原則として、「潜在意識」として「心の中」に蓄積されるので、それが何らかの形となつて、その人の人生に何らかの「影響」を与えることになるのかも知れない。そのように一般的に言つて、若い人たちは、様々なものから影響を受けやすく、また、それをすぐに真似しやすい傾向があるということに間違いなく、それは、若い人たちの髪型や服装あるいは言動などをみれば、そういう傾向があることは、もうすぐに理解できることである。

十一、家庭環境

むしろ、誰だって「真似」することからいろいろなことを「学ぶ」ことになるので、いわゆる「真似」ること自体が悪いのではなく、ただ自分を見失うほど意味なく振りまわされないようにすれば、それは、それでよいのだろう。また、テレビ番組に対しても、あまり必要以上に神経質になることもないので、人間には本来、「健全な精神」が宿っているものであり、あまり極端になれば、それに対する反省も自ずと生じて来るものであり、それほどテレビ番組に目くじらを立てなくてもよいのだろう。というのも、子供たちに与える影響の最たるものは、なんとと言っても、「家庭環境」であり、父親に愛人がいるとか、母親が浮気をしているとか、その他で、両親の仲が悪く、いつも喧嘩ばかりしてお互いを罵り合っているとか、その他、夫婦の仲が悪いというのが、一番よくないのである。

というのも、テレビから受ける影響というのは、いわば「間接的なもの」であるが、一方、親から受けるものは、まさに「もろで直接的なもの」であり、しかも自分の親が信用できない、好きになれない存在であるとすれば、その子供にとっては、一番つらいことになるのだろう。それでも、親の愛情を感じて育った子供であれば、その過程であれこれの紆余曲折はあるにしても、何とか健全に育っていく可能性は高いわけである。一方、親の愛情を受けずに育った子供たちは、どうしても情緒的に不安定になりやすく、また、人間が信じられないという思いになりやすい。しかも、心はいつも「愛情」に飢えていて、愛情を友だちや異性などに求めたがるものだが、その場合、お互いの関係がうまくいって

る時には問題はないだろうが、一方、その愛情を寄せていた異性や信用していた人間などに裏切られた時などには、異常なほど相手を憎む傾向が強くなり、それは、その人の根底に「人間が信じられない」という思いがあるからであり、そういう思いを植え付けてしまったのは、多くは親に責任があるのであり、子供の時に、必要かつ十分な愛情を降り注がないと、つねに「愛情」に飢えた情緒不安定な人間に育ててしまう危険性があるということである。

例えば、今日、家庭の主婦が社会に出て様々な「仕事」に従事することが多くなり、それだけ子供との接触が少なくなる場合が多いかと思う。特に乳幼児期に親の愛情を十分に受けなかった子供たちには、その傾向がより強くなり、やがて、「中・高時代」の青年期になった時に、一気に親への反発となり、いわゆる「非行」や「家庭内暴力」といった形で、子供の時に十分に愛情を受けなかった親へのいわば「復讐」となって表面化することも多いわけである。むしろ、親の愛情が十分に得られなかった時だけではなく、逆に、親からあまりにも盲目的な「愛情」を受けた時にも同じような結果になりやすい。それは、なぜかと言えば、例えば、草花に必要な以上に水や肥料などを与え過ぎると、いわゆる「根腐れ」を起こしてしまうのとまったく同じように、親からあまりにも盲目的な「愛情」を受けて育った子供は、自分が精神的に「自立」できないのは、親の過保護や過干渉のせいだと考えるようになり、そのために、親への反発が非常に強くなるわけである。そのように、子供たちが様々な「テレビ番組」からいろいろな影響を受けることは確かであるが、それ以上に、その子供が生まれ育った「家庭環境」から受ける影響のほうが、遙かに「根源的なもの」であり、その人の根源的な「感情や精神」などを形づくるということが非常に多いということである。

だからと言って、「テレビ番組」には何の責任もないということではなく、むしろ様々な「テレビ番組」が子供たちに与える影響も非常に大きなものがあり、しかも生まれた時から、テレビと深く関わるのが非常に多いわけだから、ほとんど「家庭環境」のひとつになっていくものである。それほどテレビの存在は、われわれの生活のなかにどこまでも深く根を下ろしているわけだから、テレビ番組の影響というのは、決して軽く見るわけにはいかないものである。ただ、子供たちが「影響」を受けるものとして、例えば、家庭をはじめ、学校や習い事あるいは学習塾などの先生や友だち、その他の人間、動植物、人工物、自然、その他、そういうものとの直接的な「関わり」のなかで様々な影響を受ける場合と、もう一つは、例えば、「……新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、マンガ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他」、そういう、いわゆる「メディア社会やその他」との「関わり」から様々な影響を受ける場合との、大きく分けて、この「二つの場合」があるということである。

十二、乳幼児から

まず、「乳幼児期」であるが、この時期の前半である乳児から二歳ぐらいまでは、家族との「関係」が中心であり、その中でも、特に「母親」（或いは母親的存在）との関係が極めて親密であり、この時期に母親とのスキンシップが不十分になると、子供は、情緒不安定になりやすく、子供に十二分に愛情を降り注いでも害の少ない時期である。

次に、物心のつく二、三歳から小学校に入る前までであるが、この時期は、ふつう子供

たちは、保育園や保育所或いは幼稚園などに通うこととなり、今までのように「家庭」だけではなく、そこで保育士や先生あるいは多くの園児たちと交わったり、また、近所の子供たちと遊んだりして、その活動も非常に活発化する時期である。そして、この「乳幼児期」は、様々な「おもちゃ類」との関係も親密であり、また、何か習い事をしたり、近くの児童公園、その他などで遊んだりする場合も多く、そのように直接的な関わりが多い時期である。もちろん、母親と一緒に絵本を読んだり、また、童話や昔話などを寝る前に聞いたりすることも多く、また、テレビでは、主に幼児向け番組やアニメあるいはお笑い番組などを中心に見ていると思うが、しかし、多くの場合、家族と一緒に様々なテレビ番組を見ていることになるのだろう。そして、そのテレビが、この時期の子供たちにどういう影響を与えるかは分かりにくいものであるが、それほど心配することはないのかも知れない。それよりも、やはり家族や友だちなどとの直接的な関わりの方が大事であり、また、そのほうが大きな「影響」を受けることになるのだろう。むろん様々なテレビ番組からの「影響」も当然あり、幼児たちは、よくテレビで見聞きした「言葉や歌或いは踊り」などを、そのままそっくり真似をしている時期ではあるが、この時期は、ただもういも悪いもなく、何でも真似ることによって、いろいろなことを身を以って貪欲に学んでいく時期にあたるわけである。それゆえ、たとえ悪い言葉を覚えたとしても、それは、ただ単に真似てるだけであり、必要に応じて注意してやれば、いくらかでも修正ができるものであり、それゆえ、必要以上の心配はあまりいらぬということである。

次に、「小学校時代」であるが、この時期は、まさに「家庭、学校、習い事や学習塾、スポーツ、地域の様々な催しや集い、学校の友だちや近所の子供たちとの様々な遊び、その他」、子供たちが最も活発に活動する時期であり、そして、この「子供」の時には、子供としての時期を過ごすことが、何よりも大事なことになるかと思う。——例えば、子供の頃から、すでに「大人の世界」を見聞きしていると、子供は、早く大人になれるから、その方がよいではないかという人もいるが、それは、大変な間違いであり、「子供」の時に、子供としての時期を十分に過ごさないと、いつまで経っても、「大人」になれないのである。つまり、子供としての時期を十分に過ごすことによってこそ、初めて、いわゆる「子供の時期」を卒業できるのであり、もし子供の頃から、すでに「大人の世界」を見聞きして、子供としての時期を十分に過ごさないと、いつまで経っても、子供っぽさが残り、子供っぽい幼稚な思考から抜け出せないのである。つまり、子供としての時期が、しっかりと「卒業」できていないために、いつまで経っても、「子供っぽさ」を大人になっても引きずってしまうものである。むろん、ここで「大人」になるというのは、タバコを吸ったり、酒を飲んだり、あるいは異性と遊ぶというようなことではなく、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になるということであり、そして、ここでいう「子供っぽさ」というのは、他人への依存心が強く、精神的な自立ができていない人間ということになるわけである。

それゆえ、学校の勉強も大事であるが、それとともに、多くの友だちと様々な遊びで思いつき遊び合うことも極めて大事なことなのである。そして、近くの空き地や川辺などで様々な虫や魚などを捕ったり、また、地域の様々な祭りや集いなどに積極的に参加したり、それらを見て、楽しい時を過ごすことも大事であり、そういう直接的な「体験・経験」こそは、その人にとって確かな手応えのある生きた「原体験」として、その人がものを考

える時の最も根底的な「拠り所」となるものである。もちろん、様々なテレビ番組からの影響も、非常に受けやすい時期であり、昔の子供たちは、様々なテレビ番組を真似た「何々ごっこ」などを、もう夢中になって行なったりしたものであるが、それは、今の子供たちもそうなのかも知れないが、そのように子供たちは、とかく影響を受けやすい、また、真似しやすいことは、事実であり、それゆえ、テレビ番組をつくる側も、ひたすら視聴率さえ上がれば、もう何でもかまわないというのではなく、ある程度は、子供たちへの影響ということも考慮に入れて、制作することも大事なことになるのだろう。

次に、「中・高時代」であるが、この時期は、第二次性徴とともに、自我がはっきりと目覚めて、異性への関心も高まるとともに、様々なものへの「好奇心」も非常に旺盛になるものであり、この時期は、様々な雑誌や書物などをはじめ、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、マンガ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他の、いわゆる「メディア社会やその他」からの影響を非常に強く受け、しかも、それを真似たり、実行したりする時期にもあたるわけである。というのも、小学生ぐらいまでは、様々な暴力的なものやポルノチックなものを見聞きしても、それを即「実行」に移すだけの「肉体的成長」がまだ不十分な場合が多いかと思うが、「中・高時代」ともなれば、そういう「肉体的な成長」もほぼ十分となり、その人がその気になりさえすれば、いくらでも暴力的なことや性的なことなども、即「実行」できるものであり、また、現実には、そういう実に様々な「青少年の非行」などが、いつの時代でも、また、どの国でも、大きな問題になっているものであるが、それは、いわゆる「第二反抗期」とも重なり合うものであり、それだけ問題が複雑かつ深刻なものになるということである。

つまり、今までは、親や先生あるいは大人たちの言うことを比較的素直に受け入れていたものが、「中・高時代」になると、親の「庇護や干渉」などから離れて、何でも自分で考え、自分で判断し、自分で行動したくなり、また、親や先生あるいは大人たちの言動などに対しても、実に様々な「疑問や矛盾」などを感じて、時には、強く「反発・反抗」するという時期でもあるが、この時期は、その人の「心の中」に深く眠っていた「自我」が目覚め、その目覚めた「本来の自我」（自己）が成長することを望んでいるために、様々なものに対する「好奇心」も極めて旺盛になり、そのために、いわゆる「メディア社会」への関心も非常に強くなるものである。そして、好きな対象があれば、その対象を積極的に受け入れ、そのために、非常に大きな影響を受けやすく、また、この時期に、どのような「……新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、マンガ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ゲーム、その他」の、いわゆる「メディア社会やその他」から、どのような影響を受けるかによって、その人の「人間形成」にも非常に大きな影響を与えるものである。——むろん、「中・高時代」は、いわゆる「友だちとの関係」からも直接的に、非常に多くの影響を受ける時期でもあり、それゆえ、できるだけいろいろな人たちと関わり、そして、そのいろいろな人たちからいろいろなことを見聞きするようなことも大事なことの一つになるのだろう。

次に、「大学・社会人時代」（十八歳頃から三〇歳前後）であるが、この時期は、就職をして社会人になる場合と、もう一つは、専門学校や短大あるいは大学などに進学してから、社会人になる場合とがあるかと思うが、そのどちらの場合でも、いわゆる「メディア社会」から様々な影響をなお受け続ける時期であるとともに、様々な「友だちや異性関係」

などからも直接的な影響を強く受けやすい時期でもあるのだろう、そして、三十歳前後になれば、その人の「全過去」(つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などから自ずと形成される、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」なども、ほぼでき上がる時期にあたるかと思う。

そして、子供がいるような大人になってから、その人がテレビ番組からどのような影響を受けて、どういうふうになるうとも、それは、その人自身の問題であり、たとえ様々な「メディア社会やその他」からどのような影響を受けようとも、そういうものに盲目的に振りまわされてしまう、その人自身にこそ、大きな問題があるということである。

話が長くなったが、確かに、様々な「テレビ番組」がそれを見聞きする人たちに何らかの「影響」を与えていることに間違いはないだろう。しかし、最終的には、その人がそれらをどのように受け入れ、そして、それらをどう消化するかにかかっているのであり、結局は、各人一人ひとりの問題になって来るのだろう。ただ、小さな子供たちや若い人たちは、様々な「テレビ番組」から比較的もろに「影響を受けやすい、あるいはすぐに真似しやすい」という傾向は、間違いなくあるわけだから、制作側も、ある程度は、そういうことも考慮に入れておく責任や義務はあるのだろうか。

*

*

人間の眼とカメラの眼との違い

人間の眼とカメラの眼との違い

それでは、人間の「眼」とカメラの「眼」との違いについて、少し話をしてみたいと思うが、ふつう「肉眼」というのは、眼に入ってくるあらゆるものを平等に見ているのではなく、その人が見ようと思っている「対象」を中心に見ているわけであり、それゆえ、見ようとしている中心部から遠ざかれば遠ざかるほどぼけてしまう傾向があるかと思う。つまり、見ようと思っているその「部分」を中心にはっきりと見えているわけだが、それ以外の部分に対しては、むしろ曖昧でぼんやりとした状態で見えている、あるいは無意識の状態に近い感じで見えているものである。むしろその人がわずかでも意識して見れば、その意識の「度合い」にはほぼ正比例して、よりはっきりとした状態で見えて来るものである。

一、人間の眼

例えば、或る女優なら或る女優を見る場合に、若しも見る側の人が、その女優の「顔」を中心に見ていたとすれば、その人は、恐らく、その女優の髪型がどのようなものであったか、耳にはどのようなイヤリングを付けていたか、あるいはどのような感じの衣装やアクセサリーなどで身を飾り立てていたか、指の先の爪には、何色のマニキュアをしていたか、さらにはどのような履き物をはいていたか、あるいはどのような感じのバッグ類を持っていたか、指輪は、どこにどのようなものを付けていたかなど、その他、そういうものを後になつて一つ一つ思い出してみると、例えば、「顔」からいちばん離れたところにある足元に、どのような履き物をはいていたかは、見落としてしまつて思い出せないことも多いのだろう。

それは、女優の「顔」ばかりを中心に意識的に見ていたために、足元の方は、おろそかになり、どちらかと言えば、無意識の状態に近い感じで見えていたので、後になつてうまく思い出せないということにもなつてしまう。そのように意識的に見ようとした「部分」は、非常にはっきりと見えていて、後になつてもよく思い出せるものであるが、一方、あまり意識せずに見ていた部分は、いわばぼんやりと見ていたために、後でよく思い出せないということにもなりやすい。そして、見る側の人が、例えば、髪型にとくに興味や関心を持つていけば、その人は、「髪型」を中心として見るようになるだろうし、また、その人が「ファッション」に専門的な関心を寄せていけば、そのファッションを中心に見るようになるのだろう。そして、その人が「髪型」なり「ファッション」なりを中心に一生命見ていると、それ以外の部分に対しては、とかく見過ごしてしまふことになりやすい。そのように、われわれの「肉眼」というのは、目に入ってくるあらゆるものをすべて平等に見ているのではなく、その人が意識的に見ようと思つたり、あるいは興味や関心を持った部分を中心として見ているのであり、それ以外のあまり興味や関心のない部分は、むしろ軽く見流している、あるいは無意識の状態に近い感じで見えているために、後になつて、その部分がよく思い出せないというようなことは、ふだんわれわれがよく経験しているところではないかと思う。

二、カメラの眼

一方、カメラの「眼」というのは、その「眼」に入って来るあらゆるものをいわば平等に写し出している。例えば、記念に写真などを撮れば、すべての人がみな平等に写し出されているものである。しかも、その写真に写し出された顔や姿あるいは背景などは、すべてはつきりと鮮明に写し出されるものであるが、われわれ人間の「眼」では、そういうわけにはいかない。例えば、ある人を中心に見れば、その人から遠く離れた人の顔は、ふつうぼんやりと曖昧になるものである。また、人間を中心に見ていけば、その背後の背景などは、ふつう見過ごしてしまうことが多い。むしろ、望遠レンズや広角レンズなどを使えば、かれば、バックをぼかすこともできるし、また、魚眼レンズや広角レンズなどを使えば、かなりダイフォルメされた写真を撮ることもできる。しかし、それ以外のふつうの場合は、ありとあらゆるものをいわば平等に写し出しているものである。

むしろ、カメラの「眼」としては、「写真」だけではなく、例えば、映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、その他の、いわゆる「映像」があり、そして、今後、ますますそういう「映像的なもの」が主流を占めることになるのだろう。そして、「写真」というものが、ある一瞬の「状態」を写し出しているのに対して、「映像」というのは、カメラをまわし続けられ、ずっと映し出しているのと同時に、ふつうそれに「音」が加わって来るものであり、それだけ「映像」の方が遙かに人間の「感覚」により近いと言えるものであるが、まず、「写真」について、もう少し考えてみたいと思う。

さて、十九世紀の中頃に誕生した「写真機」は、その後のめざましい技術革新によって、今日では、極めて高性能なカメラから極めて特殊なカメラ、また、性能も高く、取り扱いも簡単な一般的なカメラまで、実に多種多様な「写真機」が数多く出そろっていて、その人が望むようなカメラを比較的手軽に購入できる時代となり、そして、旅行などに出かけるような時には、多くの人たちがカメラを手にとって出掛け、そして、例えば、記念になるような場所によく写真を撮っては、それをアルバムに貼って大事に保存している人も極めて多く、そのように、今日では専門のカメラマンだけではなく、いわば趣味として行なっているアマチュアカメラマンの人たちも、極めて数多くいて、なかには専門家よりも遙かに有意義な活動を行なっている人たちも、意外に数多くいるということである。

それはともかく、「写真」というものが、われわれ人間の「社会生活」のなかにどれほど深く溶け込んでいるかは、驚くばかりである。例えば、新聞、雑誌、書物、CD、DVD、パンフレット、ちら紙、その他で、写真が使用されるのはもとより、様々なポスターやカレンダーなどに写真が使われることも多く、また、その人が当人であることを証明するために「写真」が使われることは、さらに多く、例えば、履歴書、学生証、受験票、運転免許証、パスポート、その他、それに社員証や行員証^{（うゐんしん）}あるいは職員証、また、最近では、写真入りの名刺などにする場合もあるかと思う。さらに見合い写真や婚礼写真、そして、子供の成長や家族を撮った「写真」、あるいは旅行に行った時の「写真」、また、運動会をはじめ、遠足や旅行或いは学園祭や卒業記念写真、さらに春夏秋冬に催される様々な行事や祭りを撮ったり、その他、もちろん、美術全集や動植物の写真図鑑、また、様々な写真集やプロマイド、その他、もう例を挙げればきりがなが、そのように「写真」というものが、われわれ人間社会のなかにどこまでも深く溶け込んでいて、われわれは、もう様々な機会に「写真」と関わっているものであり、しかも、ケータイやスマートフォン或い

はデジタルカメラなどの普及によって、今日では、もう「写真」というものをわれわれ現代社会から取り除くことなど、まったく不可能なほど深い関係にあるということである。

三、写真の特徴

それでは、その「写真」というものの特徴について、もう少し考えてみたいと思う。確かに、写真は、或る一瞬の「状態」を写し出している。そのことに間違いはない。だからと言って、写真は、或る一瞬の「事実」をいつも写しているとは限らない。なぜなら、その「光の量」の調整を間違えれば、写真は、実際とはかなり違った濃淡や色彩になりやすく、また、その写真から受ける印象と実物とは、かなり違ったものになってしまいうからである。もちろん、今日では、全自動のカメラが主流であって、そういう失敗もほとんどなく、より自然に近い感じの色彩で撮れるようになっては来ているが、それでも、われわれの「眼」が感じる色彩とカメラの「眼」が写し出す色彩との間には、かなりの違いがあるのだろう。それとともに、われわれの「肉眼」が直接見て感じる立体感や実在感と「写真」で見る感じとは、やはり、かなり違うところがあり、「写真」というのは、どうしても「平面的」（或いは一面的）な感じになりやすく、それゆえ、その立体感や実在感なども、実物とはかなり違った感じになりやすい傾向があるということである。

次に、カメラアングルであるが、どの角度から写真を撮るかによって、同じ対象でも、その感じが非常に違って見えるものであり、特に「写真」の場合には、或る一方向からカメラを対象に向けて、或る一瞬の「状態」を写し出すものであり、同じ対象でも、右から撮ったものと左から撮ったものとは感じがかなり違うものになるだろう。しかも、「写真」は、或る一瞬の「状態」を写し出すものであり、それゆえ、その前後の「状態」がどういうものであったかは、一枚の写真だけではよく分からないものである。例えば、人間の「顔の表情」などは、その時々に対応して、実に様々に変化するものだが、しかし、その一瞬の「顔の表情」が、その時のその人の「心の状態」をそのまま表しているかどうかは、極めて難しい問題であり、或る一瞬の「顔の表情」が、その時のその人の一瞬の「心の動き」をたとえ表しているとしても、それがそのままその人の持続した「心の状態」をそのまま語っているかどうかは分からないものである。つまり、人間の「顔の表情」と「心の状態」とが、いつも合致しているものではなく、例えば、最愛の肉親を亡くして、その人の「心の中」は、深い悲しみに満ちていても、人前では、ふだんとほとんど変わらない「顔の表情」をしていることもあれば、また、その人の「心の中」では激しく腹を立てていても、「顔の表情」では笑っているということもあるのだろう。それゆえ、その人の「顔の表情」が、そのままその人の「心の状態」を正確に表しているかどうかは、よく分からないものである。しかも、写真を撮る時には、隠し撮りされる場合以外は、ふつうカメラを向けられていることを知っているわけだから、どうしてもカメラを意識した「顔の表情」にならざるを得ないだろう。確かに、ある一瞬の「顔の表情」は、その時の一瞬の「心の動き」を表しやすいものであるが、しかし、それすらも必ずそうであるとは断定できないものである。しかも、われわれは、自分ですら自分の心がよく分からない時もある。また、瞬間瞬間に、自分が今どういう「顔の表情」をしているかなどは、誰だって責任の持ちようがないものである。それゆえ、「顔の表情」だけで、その人の「心の状態」をその

まま推しはかることには、やはり大きな問題があると言えるものである。

確かに、一枚の「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」を写し出している。そのことに間違いはない。しかし、その前後の「状況や状態」が、いったいどういうものであったのか、また、「写真の枠」のなかに入っていない周辺の「状況や状態」は、いったいどういうものだったのか、その他、そういうことは、一枚の「写真」だけでは、よく分からないものである。しかし、われわれは、その「一枚の写真」から実に様々な印象を受けるし、また、あれこれ豊かに想像力を働かせて、実際や実物とはかなり違ったイメージを各人が勝手につくり上げてしまう危険性も高く、ここにこそ、「写真」というものの最も危険な落とし穴がある、と言えるものである。つまり、われわれは、とかく「写真」というものは、事実を写し出しているものだ」と、簡単にそう考えがちであり、確かに、「写真」というものは、そういう一大特徴を間違いない持ち合わせているものである。もし「写真」というものが、「実物」とは似ても似つかぬものを写し出すとしたら、それこそ、「写真」というものの存在意味がまったくなくなってしまうからである。しかし、だからと言って、「写真は、つねに事実を写し出している」ということにはならないだろう。

それは、もう誰もが経験しているように、例えば、人間、動植物、自然の風景、乗物、建物、街の様子や店の感じ、あるいは様々な商品、その他、それは、もうどういうものであれ、いわゆる「写真」で見た感じと「実物」とがかなり違っていることはよくあることなのである。つまり、「一枚の写真」が与える印象が、そのまま「実物」の印象を正確に写し出しているとは、限らないものである。それは、人間の「眼」とカメラの「眼」との根本的な違いによるものもあれば、いわゆるカメラアングルや写真の切り方などによっても違って来るだろう。それに加えて、「写真」は、その人に写真技術とその気がありさえすれば、いくらでも修正を加えたり、合成写真を作ったり、あるいは故意に事実に反した意図的な写真を創り出すことも、容易にでき得るものである。また、光線などの関係から、ありもしないものを写し出すこともあり、それゆえ、写真というものを、そのまま事実（或いは真実）として盲目的に信じることには、やはり危険性があるということである。むしろ、写真には様々な長所も利点も数多くあり、その一つが、何と言っても、「百聞は一見に如かず」ということであり、例えば、ある自然の風景をあだこうだと事細かに説明されるよりも、一枚の写真を見せてもらえれば、ああ、なるほど、こういう風景なのか、とすぐに分かるわけであるから、これ以上に便利なものはないわけである。

確かに、「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」を写し出しているものであり、しかも、われわれの「肉眼」ではとらえられないような早いスピードのものを、はつきりとキャッチすることもでき得る。例えば、競馬や競輪などの「写真判定」などは、まさにその代表的なものであり、また、レントゲンのように直接見ることのできない体の中をも写し出してくれる場合もある。そのように写真の長所も数多くあり、しかも、「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」をそのまま写し出すためのものではなく、「写真」には「写真」独自の世界があり、それがいわば芸術的な写真としても幅広く存在するものである。そのように、今日では、プロのカメラマンから、まったくの素人の人たちまで、実に数多くの人たちが、いろいろな目的や用途でカメラを利用し、様々な「写真」を撮っては、各人それぞれ思い思いに楽しい時を過ごしているということである。

四、映像の特徴

一方、「写真」が、ある一瞬の「状況や状態」を写し出しているのに対して、「映像」というのは、ある持続した「状況や状態」を映し出しているものであり、それだけ人間の「感覚」により近くなるとともに、確かに「映像」というのは、現実とほとんど同じものを映し出しているものである。しかし、「映像」と「現実」との決定的な違いは、一体、どこにあるのかと敢えて問えば、それは、「映像の世界」というのは、まさに「視覚と聴覚」だけの世界であり、それ以外の、つまり、「……嗅覚、味覚、触覚、温度感覚、その他」などの感覚は、直接、知覚できないというところにあるのである。

例えば、料理番組を観ていけば、その料理がどういうものであるかはよく分かるが、しかし、どういう味や香りがするのかは、まったく分からない。また、春夏秋冬の自然の風景などを観ていても、例えば、そこに吹く風や暑さあるいは寒さなどの感じ、また、様々な動植物などにふれた感じや草花の香りや匂い、海の中を泳いだ時の感じや砂浜の感触、また、山などのキャンプ生活で虫に刺されたりや溪流などの水の冷たさ、あるいは、登山の厳しさや火山爆発の凄さなど、その他、そういうものは、いくら映像や言葉で説明されても、実感としては、よく分からない。また、映画やドラマなどで男女の濡れ場などを観ても、その実際の感触は、観ている人たちにはまったく分からない。また、ニュースなどで台風の激しい暴風雨などを生中継すれば、それを映像で観ている人たちは、「ああ、すごいなあ!」とは思っても、直接、それを実感することはできない。そのように、われわれが「映像」を通して観るのと、実際に自分がそれを「体験・経験」するのでは、少し違うというよりは、むしろ根本的に違うものである。つまり、「映像」が、いわゆる「視覚と聴覚」だけの世界であるのに対して、われわれが現実に「体験・経験」する世界というのは、「視覚や聴覚」だけの世界ではなく、それに加えて、「……嗅覚、味覚、触覚、温度感覚、その他」などの総合的な世界であり、そういう様々な感覚を通じて、われわれは「現実社会」で様々な「体験・経験」をしているということである。それゆえ、例えば、ライブ・ステージなどを、その会場に行って、実際、生で音楽を聴くのと、それと同じものをテレビやビデオあるいはDVDなどで見聞きするのでは、少し違うというよりは、何かまったく違うもののように感じられるものである。それは、音楽だけではなく、例えば、スポーツの競技場の熱気や生の迫力なども、映像とはかなり違うものになるのだろう。とは言え、「映像」は、これから、ますます大きな役割を果たすことになるのだろう。

確かに、テレビやビデオあるいはDVDなどは、一応、現実と同じようなものを映し出しているものである。例えば、テレビが行なう「生中継」などでは、現実とまったく同じようなものを同時進行で鮮やかに映し出しているものであり、これは、やはり極めて大きな機能なのである。しかも、後で何度でも再生することができ、しかも、例えば、スポーツなどの生中継であれば、もう一度、観たい場面などは、何度でもリプレーでじっくりと観てくれるわけだから、その機能には実に素晴らしいものがあると思うとともに、それは、そのまま「現実」の生きた「記録保存」ともなり得るものである。そのように「映像」というのは、現実というものをそのままそっくり映し出しているように一見見えるが、しかし、厳密に考えれば、やはり「写真」と同じように、われわれ人間の「肉眼」とカメラの「眼」との間には、根本的な違いがあるということである。例えば、われわれの「肉眼」

が直接感じる「色彩や立体感あるいは実在感」などと、カメラの「眼」がとらえるものとの間には、やはり違いがあるだろうし、また、カメラの「眼」からはずれた部分が、いったいどうなっているかは、まったく分からない。さらに生中継以外は、例えば、映画、テレビ、ビデオ、DVD、動画、その他などは、すべて数多くのカットとカットとの映像をつなぎ合わせたものであり、そこには制作側のはっきりとした作り手の意図があるわけだから、「事実」そのものをそのままそっくり映し出しているとは言えないものである。また、テレビに出演している人たちも、それが芸能人であれ、あるいは素人の人たちであれ、どうしてもテレビカメラというものを意識するだろうし、そうなれば、やはり、そのテレビ番組に合わせたような対応になるのは、仕方のないことである。そのようにテレビで見聞きしたものを、そのまま「事実」（或いは「真実」として盲目的に信じることには、やはり大きな危険性があると言えるものである。

むろん、そういう細かなことをいろいろ気にする必要は何もないわけで、テレビでもビデオでもまたDVDでも動画でも、その人なりに気楽に楽しめば、それでよいものであり、また、誰だつてそうしているわけである。そして、最近では、ホームシアターなども非常に普及しているとともに、今日では、写真だけではなく、最新の「ビデオカメラ」などを使って、例えば、子供の成長記録や運動会などを撮ったり、また、旅行などに行った時にも、ビデオカメラなどを使って撮ることも多いかと思う。また、様々なパーティーや宴会の様、また、結婚式や披露宴などを記念に撮ったり、あるいは趣味として、様々な工夫を凝らしたビデオなどを作ったり、あるいは動植物の生態や自然の風景などを記録として撮る場合もあるのだろう。また、市販されている「DVDやブルーレイ」などにも多種多彩なものがあるかと思う。例えば、多種多彩な映画や音楽の「DVDやブルーレイ」などを初めとして、各種多彩な実用的な「DVDやブルーレイ」もあれば、アダルト系の「DVDやブルーレイ」などもあり、その他、今後、ますますそのような多種多彩な「DVDやブルーレイ」などとともに、最新の「ビデオカメラ」の使用なども、さらに日常一般化し、もう誰でも手軽に様々な「目的や用途」などで使用できるようになるかと思う。

そのように、「……映画、テレビ、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、その他」の「映像」（写真）は、あらゆる「分野」（領域）に渡って、今後、極めて大きなウェートを占めていくことは間違いなく、それだけわれわれは、毎日、日常茶飯事のように様々な「映像」（写真）と関わって生活するようになり、また、それを当然のように受け入れるようになるかと思う。それは、それでよいわけだが、ただ、「写真や映像」で見聞きしただけで、実際に自分が見聞きし、それを「体験・経験」したような気分になりやすく、それだけでも満足しがちなものであるが、しかし、「写真や映像」で見聞きしたものは、すべて「間接的な知覚」であり、自分がその場で実際に見聞きし、それを「体験・経験」する場合は、いわゆる「直接的な知覚」とは少し違うというよりは、むしろ「根本的に違う」ものであると、はっきりと自覚を持つことは、非常に大事なことであり、そうでないと、「写真や映像」を見ただけの感じで、それをそのまま「事実」（或いは「真実」として盲目的に信じてしまう危険性があるからである。それは、「写真」は、或る一瞬の「状況や状態」を写し出す「視覚だけの世界」であり、また、「映像」は、カメラの「眼」がとらえた「視覚と聴覚だけの世界」であり、われわれが実際に見聞きし、「体験・経験」している総合的な「知覚」とは、はっきりと違うものであり、また、われ

われの「肉眼」とカメラの「眼」との違いについても、十分に考慮に入れなければならぬ。とは言え、一人の人間が実際に見聞きしたり、「体験・経験」したりすることには、自ずと限界があるのである。それを補うように様々な「写真や映像」などを見ることによって、それこそ、何百、何千倍もの多種多様なものを間接的ではあるが、ほぼ実際に近い状態で見聞きすることができ、しかも、ふだんわれわれの「肉眼」では見ることでできないようなものまで、例えば、空からの撮影や海の中の生物の様子、また、様々な動植物の生態や宇宙の世界まで見せてくれることもあるわけだから、これは、やはり実に素晴らしいものであると言えるものである。

それに比べて、確かに自分自身が見聞きし、「体験・経験」することには、自ずから限界がある。しかし、その直接的な「体験・経験」こそは、われわれが「実感」として確かに感じることができ得る「唯一絶対のもの」であり、それこそが「確かな手応えのある」ものなのである。とは言え、この世にあるありとあらゆるものを実際に見聞きし、直接、「体験・経験」することなど誰にも不可能なことであり、それを補うためにも様々な「写真や映像」などを見聞きすることによって、何百、何千倍もの多種多様なものを間接的ではあるが、見聞きすることができるわけである。そのように自分自身が直接見聞きし、「体験・経験」することによって、いわゆる「実感」を得ることは、極めて大事なことであり、それに加えて、多種多様な「写真や映像」などで見聞きすることも大いに取り入れ、最大限に活用すれば、それだけ「必要かつ十分」なものになるので、どんな「写真や映像」なども、積極的に最大限活用するのが一番よいことになるだろう。というのも、われわれの「肉眼」は、とかく間違いや勘違いをおかすことも多く、また、遙か遠くにあるものや速く動くもの、あるいは極めて微小なものなどを正確に捉えることができないという難点があり、それを補ってくれるのが、まさにカメラの「眼」であり、われわれの「肉眼」よりも遙かに正確に対象を捉える機能を持っているわけだから、それを最大限に活用することによって、われわれ人間の「肉眼」の欠点を補うことになることも、カメラの「眼」によってとらえられた対象は、まさに「写真や映像」として、かなり長い歳月に渡って、「保存」や「再生」が可能になるという利点もあるわけである。そのように、「写真や映像」などを最大限に活用したらよいと思うし、また、実際、すでに「映像化時代」は到来しているのである。ただ心配なのは、いわゆる「映像的なもの」にあまりに片寄り過ぎるあまり、一方の「活字」を軽視するような風潮になるとすれば、それは、やはり大きな問題であり、「活字」だけに片寄るのも、また、「映像」だけになってしまうのも危険なことであり、やはり「活字」と「映像的なもの」とがバランスよく、しかも、より高いところで「深く調和」させることこそ、これからの大きな課題になっていくということである。

五、インターネット時代

さらに、今日では、例えば、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他、そのような「インターネット」による「情報伝達手段」の発達も、めざましいものがあるかと思う。それでは、従来型の「マスメディア」（つまり「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」と、今日型の新しい「インターネッ

ト文化」との「決定的な違い」は、いったいどこにあるのかと敢えて問えば、それは、次のようになるかと思う。

まず、最初に考えられることは、その「規模」の大きさの違いである。つまり、従来型の「マスメディア」の場合は、基本的には「国内的な規模」のものであるのに対して、今日型の新しい「インターネット」の場合には、この地球上のありとあらゆる地域がインターネットで繋がっている、まさに「全世界的な規模」の情報伝達手段であるということである。つまり、その「規模の大きさ」があまりにも違い過ぎるということである。次に、考えられることは、その「情報伝達の速さ」の圧倒的な違いである。つまり、従来型の「マスメディア」である、例えば、新聞、雑誌、書物、その他などは、いわゆる「情報伝達の速さ」という点だけから言えば、あまりにも遅過ぎる。また、テレビもラジオも「情報伝達」の手段としては、比較的「速い」ほうであるが、しかし、「ニュース速報」やすぐに「生中継」などに切れ換えれば速いが、それ以外の場合には、どうしても「ニュースの時間」まで待たなければならず、例えば、あるスポーツの結果がすぐにも知りたいと思っても、今までは、ニュースのスポーツの時間まで待たなければならなかったが、今日では、ウェブサイトで、一瞬にして「知りたい情報」が得られるようになっていたのである。

また、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の「インターネット」の場合には、まさに「一瞬で、全世界に情報が発信される」ということである。しかも、その発信地も、その発信時間も、そして、その発信者も、いわゆる「マスメディア」のように限られた場所から、限られた時間に、そして、限られた人たちによって行なわれるものではなく、むしろ「インターネットで繋がっているありとあらゆる地域のありとあらゆる人たちが発信者になり得る」ということである。つまり、その「規模」とその「速度」、そして、その「発信者の数」などが、あまりにも圧倒的に違い過ぎるという、まさに全員参加型の「全世界規模での情報伝達手段」であるということである。しかも、その内容も、「マスメディア」では極めて限定的なものであるが、一方、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の「インターネット」の場合には、まさに「ありとあらゆる内容のものが、ありとあらゆる時間に、ありとあらゆる地域から全世界にと発信される」ということである。

もちろん、従来型の「マスメディア」の良さも当然あるわけで、それは、何と言っても、「情報の正確さ」ということであり、必ず裏を取り、うそや曖昧なもの或いはでたらめな情報などは、原則として、すべて排除されているということである。一方、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の「インターネット」の場合には、ほんとうのことともうそのこともまた曖昧なものでもたらめなものも、その他、もうありとあらゆるものがあり、それゆえ、その「情報」のどこまでが信用できるかが最大の問題であるとともに、それらの問題をこれからどのように解決していくかが最大の問題の一つとなっていくのだろう。

六、結び

そして、今や、まさに世界中のありとあらゆる地域のありとあらゆる人たちとインターネットで繋がっているという、そういう、まさに「インターネット時代」の到来ではある

が、それでは、その「インターネット時代」というものは、これからのわれわれ人間社会に、いったいどのような「影響」を与えることになるのだろうか？ また、その「インターネット時代」のまさに「長所や短所」というものは、一体、どのようなものになるのだろうか？ それらのことについて、もう少し考えてみたいと思う。……

例えば、誰もがよく知っている有名な「YouTube」というサイトがあるが、これなどは、まさに「映像化時代」を現実的に「具現化したもの」であり、それは、世界中のありとあらゆる地域のありとあらゆる人たちの誰であれ、その有名な「YouTube」というサイトへと自ら「投稿した映像」の実に膨大の量の宝庫であり、それゆえ、例えば、自分が見聞き知りたいことを、その「検索」に入力してクリックをすれば、多くの場合、それらの「映像」を見聞きすることが出来るようになっていく。例えば、昔の懐かしい「音楽」や「ドラマ」などを見聞きしたいと思えば、例えば、その「検索」に「ザ・ピーナッツの恋のバカンス」とか、「松坂慶子の愛の水申花」とか、或いは、「竹脇無我と栗原小巻の三大家族」などと入力すれば、それらの「映像」がそれぞれ映し出されて来るものであり、もしこの有名な「YouTube」というサイトがなければ、恐らく、二度と見られなかった「映像」に違いないのである。もちろん、そこでたとえ見聞きできなくても、例えば、有料サイトに入れば、比較的低価格で、古今東西を問わず、世界中の実に膨大かつ様々な「音楽や映画或いはドラマやアニメ、その他」、何であれ、自分の見聞き知りたいたいの、ほとんどすべてを見聞きすることができ得るとともに、今、すぐにも知りたい、実に様々な最新の「情報や知識」（例えば「政治、経済、国際情勢、教育、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、また、ショッピング、旅行、ホテル予約、天気、食べ物、レストラン、美容、出会い系、銀行、電子書籍、ゲーム、その他」、何であれ、まさに「アクセス一つ」であつという間に見聞きすることができ得るものであり、そういう意味では、まさに「画期的なもの」であり、いわゆる従来の「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）だけの時代には、決してでき得なかつたことであり、それは、世界中のありとあらゆる分野の実に膨大かつ多種多様な「情報や知識」などが何の苦もなくあつという間に見聞き知ることのでき得るような時代になつたということである。

つまり、昔は、まさに「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）などから、実に様々な「情報や知識」などを得ていたものであるが、もちろん、それは、今なおそうではあるが、しかし、時代は、今までの従来型の「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）などの時代から、まさに今日型の「インターネット時代」（例えば、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他）へと大きく移行し始めているということであり、しかも、従来型の「マスメディア」（例えば「新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、その他」）なども、今日型の「インターネット」（例えば、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他）の中へとどんどん取り込まれているのであり、それゆえ、今や「インターネット一つ」で、ほとんどすべての用を足すことができ得るような時代になつたということである。この「流れ」は、もう誰も止めることのできない、まさに「新しい時代の到来」であり、この「大きな潮流」こそは、まさに「インターネット時代」の「最大の長所」にもなり得るものである。

確かに、「映像化時代」というのは、この世の実に様々な「活動や出来事」その他など

をそのままそっくり映像で映し出すことのできる時代のことであり、それは、まさに「画期的なもの」ではあるが、しかし、一方、その「表面的な映像」のもっと奥にある、この世の実に様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などは、映像では映し出すことのでき得ないものであり、そういう「最大の欠点」をも同時に持ち合わせているものである。——つまり、「映像」というのは、どうしても「表面的な現象」（つまり実に様々な物事の「表面的な現象」や実に様々な人間の「表面的な現象」（つまり実に様々な物事の「表面的な現象」や実に様々な人間の「表面的な言動」）などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿」（つまり「事実や真実」その他）などと思ひ込みやすいところがあるが、しかし、そのような「表面的な現象」（つまり「見た目の感じ」というのは、いわば「仮相」であり、いわゆる「実相」そのものであるかどうかはよく分からないものであり、それゆえ、物事の「仮相」ではない、もっと奥にある「実相」そのもの（つまり「真の姿」）をとらえることが、何よりも大事なことになるが、それを行なっているのが、まさにわれわれ人間の「思考（思索）活動」であり、そのようなことは、むしろ従来の「活字文化」（例えば「新聞、雑誌、書物、その他」）のほうが、遙かに得意としたものである。……

つまり、われわれ人間の「目」によってとらえられるものは、すべて物事の「表面的な現象」に過ぎず、それは、絶えず変化して止まることのないものであり、それゆえ、まさに「仮相」（つまり「仮の姿」）であるが、その「表面的な現象」のもっと奥にある物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを厳密にとらえることが、すなわち、「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということであるとともに、それには、当然のことながら、それぞれ「個人差」があり、そして、真に「内的成長（成熟）」した「心の眼」によつてこそ、初めて、どこまでも厳密にとらえることができ得るようになるということである。一方、そうではない人たちというのは、どうしても「表面的な現象」などに意味なく振りまわされてしまい、もっと奥にある、いわゆる物事の「実相」（つまり「真の姿」）をとらえるということは、なかなかできにくいとともに、その「表面的な現象」（つまり実に様々な物事の「表面的な現象」や実に様々な人間の「表面的な言動」）などを見聞きしては、それをそのまま「真の姿」（つまり「事実や真実」その他）だと思ひ込みやすいということでもあり、それこそは、まさに「映像化時代」の「最大の欠点」となっていくものである。それゆえ、何よりも大事なことは、むしろ従来型の「活字文化」（例えば「新聞、雑誌、書物、その他」と、今日型の「インターネット文化」とを、より高いところで深く調和させることこそは、何よりも重要かつ大事なことになるということである。

*

*